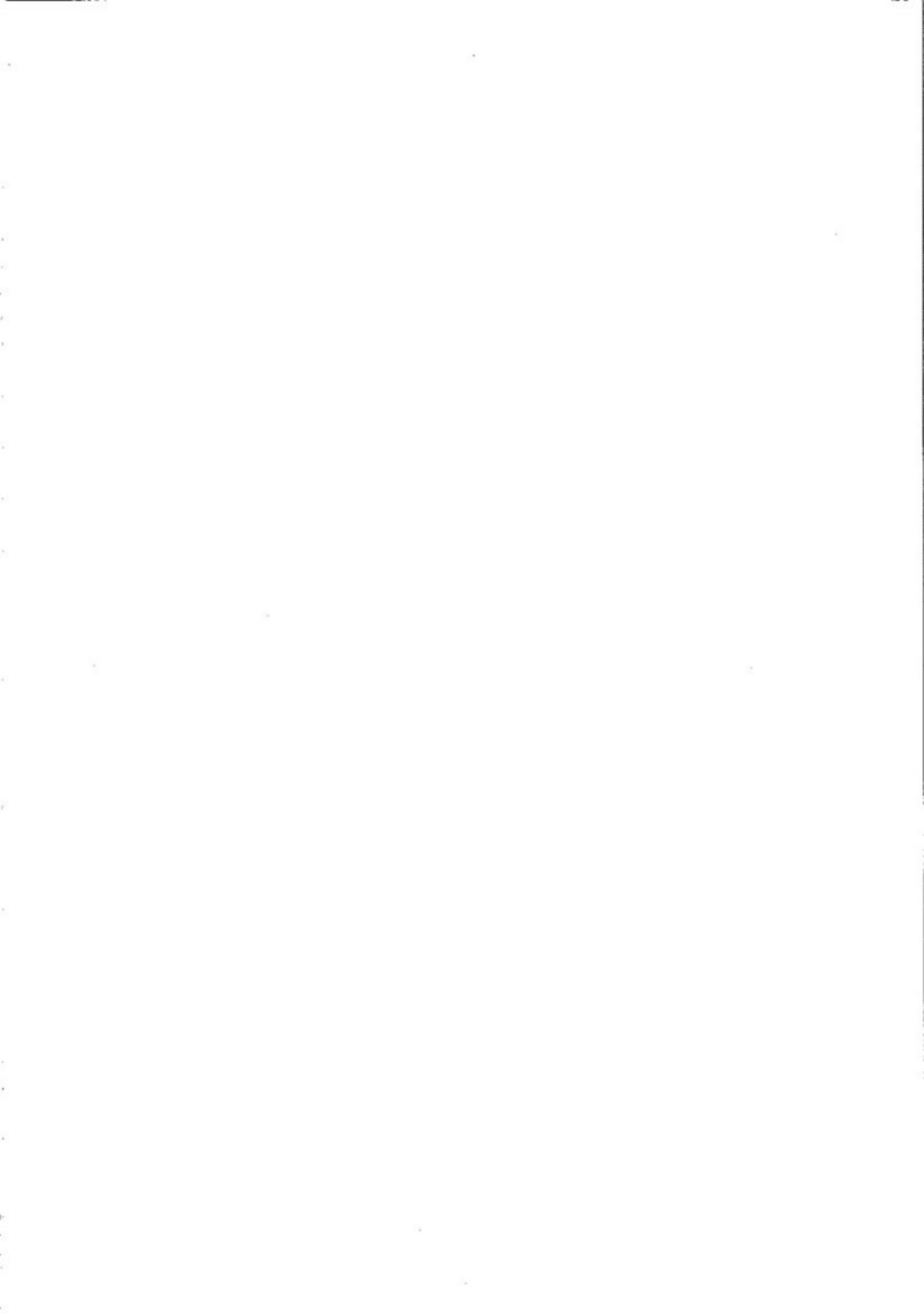


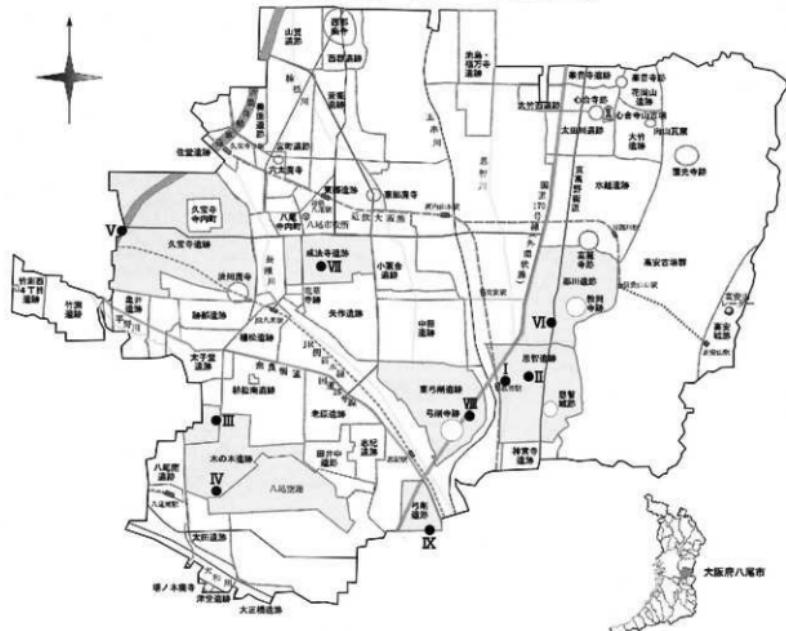
- I 恩智遺跡(第20次調査)
- II 恩智遺跡(第21次調査)
- III 木の本遺跡(第16次調査)
- IV 木の本遺跡(第17次調査)
- V 久宝寺遺跡(第75次調査)
- VI 郡川遺跡(第9次調査)
- VII 成法寺遺跡(第21次調査)
- VIII 東弓削遺跡(第17次調査)
- IX 弓削遺跡(第10次調査)

2011年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



- I 恩智遺跡 (第20次調査)
- II 恩智遺跡 (第21次調査)
- III 木の本遺跡 (第16次調査)
- IV 木の本遺跡 (第17次調査)
- V 久宝寺遺跡 (第75次調査)
- VI 郡川遺跡 (第9次調査)
- VII 成法寺遺跡 (第21次調査)
- VIII 東弓削遺跡 (第17次調査)
- IX 弓削遺跡 (第10次調査)



2011年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東寄りに位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古く旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では、古大和川水系が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に、弥生時代以降の生活の跡が連続と積み重なっています。

このような先人の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといつても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで、私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めています。

本書は、市民生活に密接にかかわる公共下水道工事に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成21年度に行った9件の調査成果が集録されています。今回報告する調査地からは、弥生時代中期以降中近世に至るまでの遺構や遺物が検出され、古代史上での八尾市の重要性があらためて認識されたといえます。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、八尾市下水道部をはじめ多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 西浦昭夫

序

1. 本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成21年度に実施した、公共下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成23年3月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記の目次のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は、I・III・V 坪田真一、II 関田清一、IV・VI 高萩千秋、VII・VIII 成海佳子で、全体の構成・編集は坪田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の1(平成8年7月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成22年度版)をもとに作成した。
1. 本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である。
1. 本書で用いた方位は磁北、又は座標北(國土座標第VI系〔日本測地系〕)を示している。
1. 遺構名は下記の略号で示した。
井戸 - SE 土坑 - SK 溝 - SD 小穴 - SP 落ち込み - SO 自然河川 - NR
1. 遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他が白を基調とした。
1. 土色については『新版標準土色帖』1997年後期版 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1. 各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目 次

はしがき

序

I	恩智遺跡 第20次調査(O J 2009-20)	1
II	恩智遺跡 第21次調査(O J 2009-21)	7
III	木の本遺跡 第16次調査(S K 2009-16)	11
IV	木の本遺跡 第17次調査(S K 2009-17)	23
V	久宝寺遺跡 第75次調査(K H 2009-75)	27
VI	郡川遺跡 第9次調査(K R 2009-9)	33
VII	成法寺遺跡 第21次調査(S H 2009-21)	39
VIII	東弓削遺跡 第17次調査(H Y 2009-17)	49
IX	弓削遺跡 第10次調査(Y G E 2009-10)	59

報告書抄録

I 恩智遺跡第20次調査(O J 2009-20)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智中町一丁目地内で実施した公共下水道工事(20-112工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第20次調査(O J 2009-20)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成21年9月14日～平成22年10月22日(外業実働4日)に、坪田真一・高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約20m²である。
1. 現地調査においては、梶本潤一・田島宣子・中浜輝志・村井俊子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後随時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－市森千恵子・村井、遺物トレース－市森が行った。
1. 本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	2
1) 調査の方法と経過.....	2
2) 層序.....	2
3) 検出遺構と出土遺物.....	2
3.まとめ.....	4

I 恩智遺跡第20次調査(OJ 2009-20)

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目にあたり、南北約1.0km、東西役1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓から形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡は、大正6年(1917)の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍藏氏による試掘調査、昭和14年(1939)の大坂府の事業による藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告をはじめとした多くの調査が実施されており、縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として古くから周知されている。近年も天王の杜周辺とその南～南西側、北側を中心に多くの発掘調査が行われ、本遺跡は天王の杜周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡西部を北流する恩智川左岸に当たる。恩智川改修に際しては、昭和50~53年(1975~1978)に瓜生堂遺跡調査会による発掘調査が実施されており、縄文時代前期~古墳時代中期の遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査地位位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智中町1丁目地内で実施された公共下水工事(20-112工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第20次調査である。

調査地は人孔・小マンホール部分5箇所である。平面の規模は1~3区-約2.0×2.0m、4・5区-約1.1×2.2mで、総面積は約20m²を測る。調査区名は北西から1~5区と呼称した。

掘削は工事掘削深度である現地表(T.P. +11.6m~12.3m)下2.0m~2.8mまで(一部、工事掘削深度以下に及ぶ。)について、人力・機械を併用して平面・断面の調査を行い、遺構・遺物の検出に勤めた。

調査で使用した標高値の基準は、2区南部に位置する八尾市街区補助点〈3E230:T.P.+11.618m〉である。

2) 基本層序

調査地は、北流する恩智川左岸の自然堤防上に当たるため、東から西に向かって低くなる地形上に位置し、1・2区と3~5区では現地表面で約0.6mの比高差がある。

ここでは地区毎に層序を概観する。0A・0B層は盛土・客土・既設管路等の埋め戻し土である。

1区：101層は滯水性、102・103層は流水性の水成層である。104層は粘土質シルト～中粒砂の複雑な堆積で、水成層であろう。105層は滯水性の水成層。106層は流水層で河川堆積である。

2区：201層は滯水性の水成層で、Fe斑を多く含む。202層は流水堆積。203・204層はブロック状を呈し、作土の可能性がある。205~207層は水成層である。

3区：301~303層は流水層。304~306層は炭を含み、北に向かって下がる様相で、落ち込み状の遺構埋土の可能性がある。307層は流水層である。

4区：401・402層は滯水性、403層は流水性の水成層である。

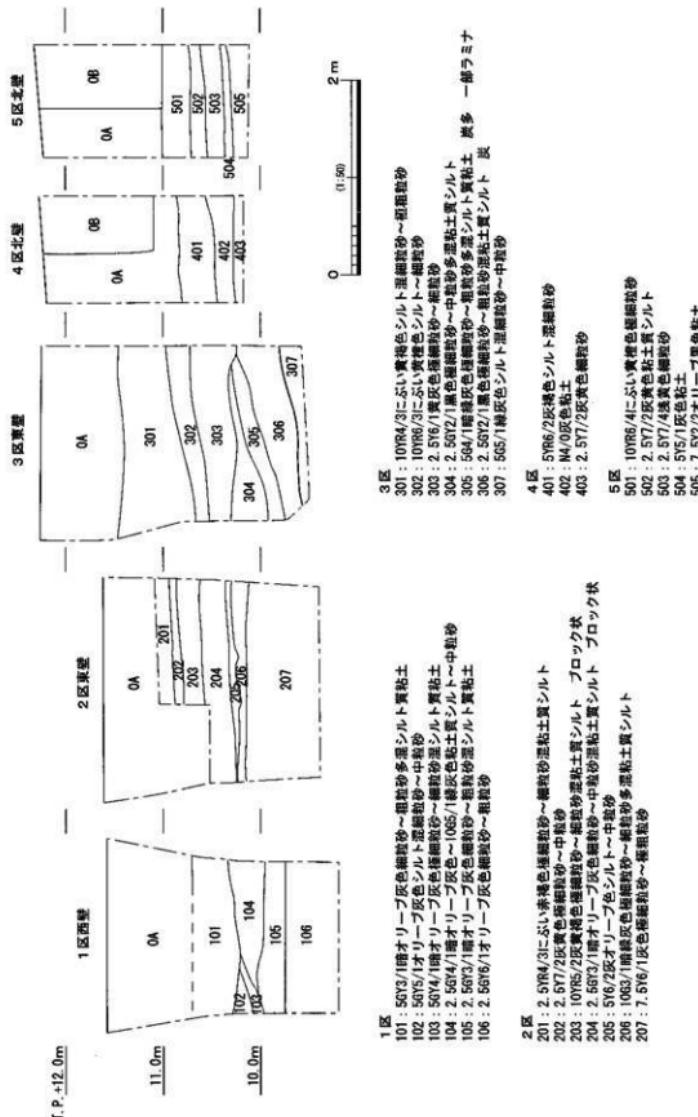
5区：501・502・504層は滯水性、503層は流水性の水成層である。505層は暗色を呈し土壤化していると考えられる。周辺で確認されている弥生時代に相当する地層の可能性がある。

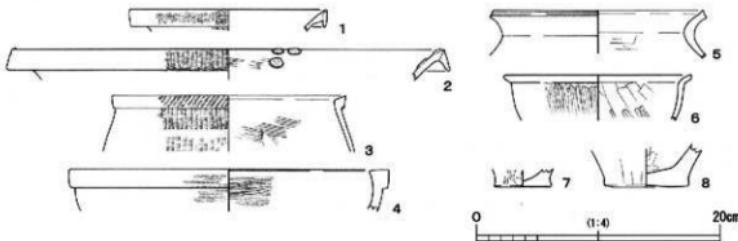
3) 検出遺構と出土遺物

明確な遺構は検出されなかつたが、落ち込み状遺構の可能性がある3区304~306層からは弥生時代中期後半に比定される土器が多く出土している。



第2図 調査区位置図





第4図 出土遺物実測図

1・2は口縁端部外面に櫛描縦状文を施す広口壺で、2は口縁部内面に円形浮文を付している。3は無頸壺で、口縁部外面に櫛描列点文、体部外面に櫛描縦状文を施す。4は鉢であろう。ヘラミガキ調整で、色調は淡灰赤色を呈し、非生駒西麓産の胎土である。5は壺である。6は鉢で、外面調整はヘラミガキ。7・8は壺底部である。

3.まとめ

今回の調査は点的なものであったが、恩智川沿いに当たる3・5区において、遺構の可能性がある地層や土壤化層の存在を確認した。遺構面の標高はT.P.+10.3m前後で、時期的には弥生時代中期後半に当たるが、これは東側の恩智川河川改修に伴う調査成果とも合致するものであり、当該期の集落域の広がりが確認された。

参考文献

- ・瓜生堂遺跡調査会1980「恩智遺跡」



調査地周辺〈3～5区〉(北から)



1区 挖削状況(北から)



1区 西壁



2区 東壁



3区 東壁上層



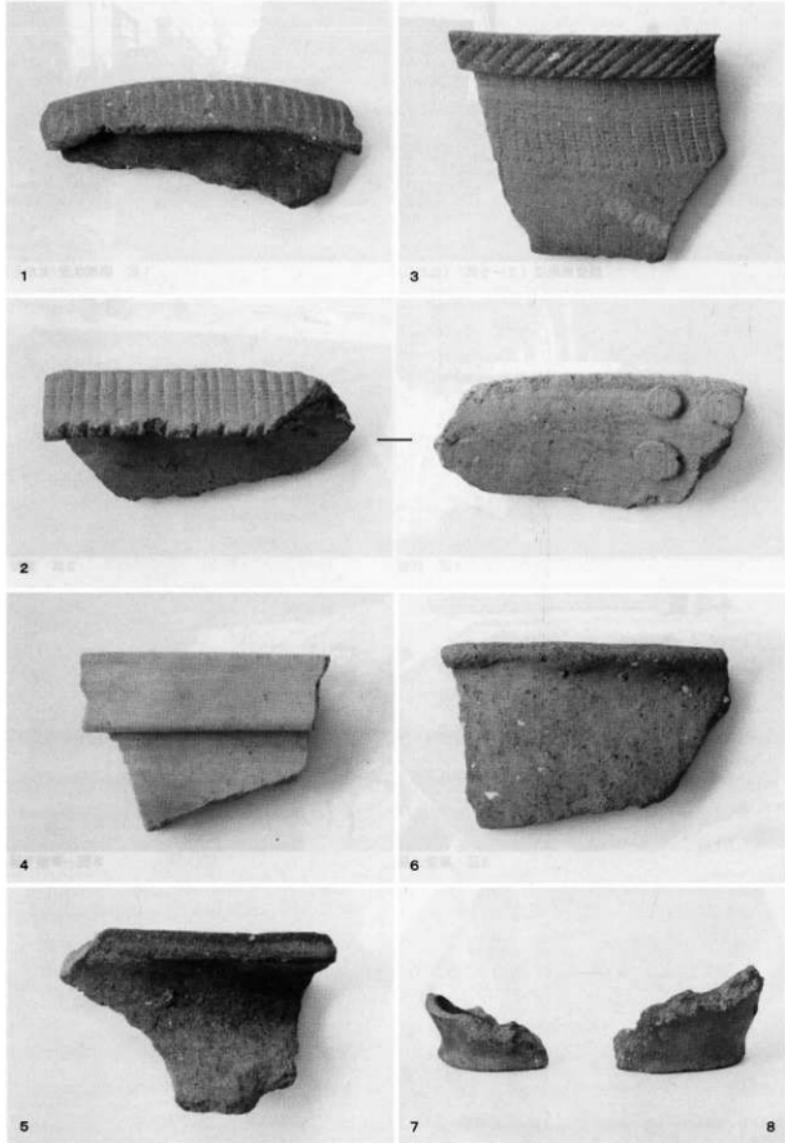
3区 東壁下層



4区 北壁



5区 北壁



II 恩智遺跡第21次調査(OJ 2009-21)

（2009年1月20日）

（2009年1月21日）

（2009年1月22日）

（2009年1月23日）

（2009年1月24日）

（2009年1月25日）

（2009年1月26日）

（2009年1月27日）

（2009年1月28日）

（2009年1月29日）

（2009年1月30日）

（2009年1月31日）

（2009年2月1日）

（2009年2月2日）

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市恩智北町3丁目地内で実施した公共下水道工事(21-18工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する恩智遺跡第21次調査(OJ 2009-21)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成22年3月5日～3月8日(外業実働2日)に、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約30.5m²である。
1. 現地調査においては、北原清子・村井俊子・山内千恵子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後隨時実施し、平成23年3月31日に完了した。
1. 本書の執筆・編集は岡田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	7
2.調査概要.....	8
1) 調査の方法と経過.....	8
2) 基本層序.....	8
3.まとめ.....	8

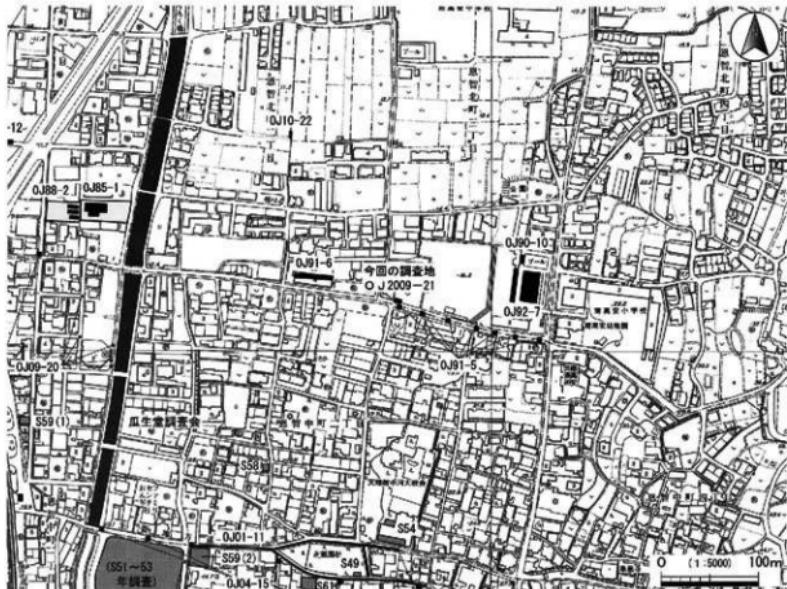
II 恩智遺跡第21次調査(O J 2009-21)

1. はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町1～4丁目、恩智中町1～5丁目、恩智南町1～5丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓から形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡は、大正6年(1917)の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍藏氏による試掘調査、昭和14年(1939)の大坂府の事業による藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告をはじめとした多くの調査が実施されており、縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として古くから周知されている。近年も天王の杜周辺とその南～南西側、北側を中心に多くの発掘調査が行われ、本遺跡は天王の杜周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲中央のやや北に当たる。周辺での調査としては、南東に接して第5次調査〈No 1 グリッド〉の他、西約100mでは第6次調査を実施しており、前者では古墳時代～中世頃と思われる溝、後者では弥生時代中期前葉の土坑・溝等の集落遺構を検出している。



第1図 調査地位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市恩智北町3丁目地内で実施された公共下水工事(21-18工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第21次調査である。

調査地は立孔部分1箇所である。平面の規模は東西長約7.4×南北幅約4.1mで、総面積は約30.5m²を測る。

掘削は工事掘削深度である現地表(T.P.+16.0m前後)下1.0mまで重機によって排除した後、以下、1.5m前後を人力・機械を併用して平面・断面の調査を行い、遺構・遺物の検出に勤めた。なお、調査終了後は、最終調査面よりさらに1.5m前後の工事掘削深度まで下層確認調査を実施した。

調査で使用した標高値の基準は、八尾市土木部下水道建設課が立孔西部に移設した仮基準点(T.P.+15.613m)を使用した。

2) 基本層序

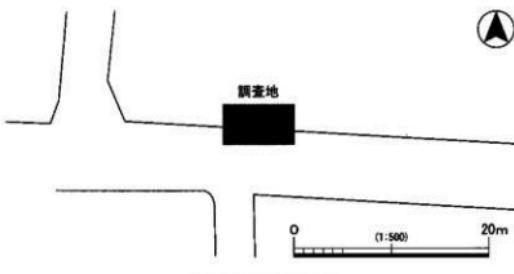
現地表下1.0m前後は、既往の市道築造時に伴う造成土である。第1層は市道築造以前に存在した耕作土。第2・3層は滲水性の水成層。第4~6層は細粒砂~中粒砂を主とする流水性の水成層。第7層は湿地性のシルト層。第8~11層は細粒砂~中粒砂で構成される河川堆積で、第8層中には微細な炭化物ラミナ(層厚0.1~0.3cm)が3層挟まる。第12~16層は湿地性を示すシルト~粘土質シルトで、各層内には、僅かに植物炭化物が含まれる。第17・18層は湿地性の堆積層で、酸化鉄分が多量に含まれる。

3.まとめ

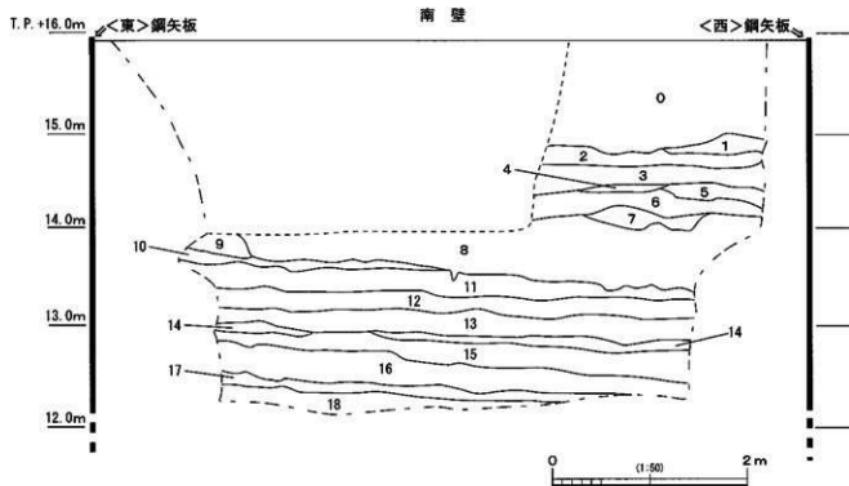
当地は地層の堆積状況から見て、湿地性を呈する土地条件であったことがわかった。本調査地では、遺構および遺物は検出されなかったが、南側に近接する既往の調査成果(西村1992)から、現地表下1.0~2.0m(T.P.+15.0~14.0m)の地層年代については、古墳時代~中世に相当するものと考えられる。

参考文献

- 瓜生堂遺跡調査会1980「恩智遺跡」
- 西村公助1992「IV 恩智遺跡第5次調査(OJ91-5)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財団法人八尾市文化財調査研究会報告34」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則1992「V 恩智遺跡第6次調査(OJ91-6)」「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 財団法人八尾市文化財調査研究会報告34」財団法人八尾市文化財調査研究会



第2回調査区位置図

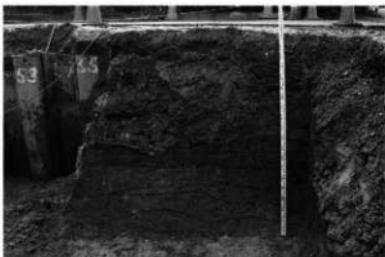


- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 0 : 盛土および道路築造時のカクラン | 10 : 7.5GY5/1 緑灰色極細粒砂 |
| 1 : 2.5Y5/6 明赤褐色砂疊混シルト | 11 : N4/0 灰色中粒砂 |
| 2 : 10B64/1 單青灰色シルト | 12 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト |
| 3 : 7.5YR6/6 棕色シルト | 13 : 10YR4/1 灰褐色シルト |
| 4 : 10YR6/3 にぶい黄褐色縞～極細粒砂 | 14 : 5YR4/2 黄褐色シルト |
| 5 : 7.5YR5/6 明褐色中～細粒砂 | 15 : 7.5YR5/3 にぶい褐色砂疊混じりシルト |
| 6 : 7.5YR6/7 反褐色中～細粒砂 | 16 : 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト |
| 7 : 5B3/1 單青灰色粘土質シルト | 17 : N3/0 單灰色粘土質シルト |
| 8 : 7.5YR5/2 反褐色中粒砂 | 18 : 7.5YR6/3 にぶい褐色砂疊混じりシルト |
| 9 : 7.5GY5/1 緑灰色砂疊混シルト | |

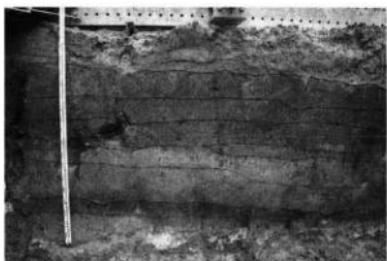
第3図 南壁断面図



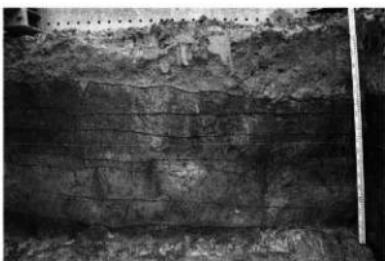
調査地全景(南西から)



南壁西部断面(T.P.+14.0~16.0m)



南壁東部断面(T.P.+12.2~14.0m)



南壁西部断面(T.P.+12.2~14.0m)



調査風景(北西から)



下層確認調査風景(北西から)

III 木の本遺跡第16次調査(S K2009-16)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南木の本三丁目地内で実施した公共下水道工事(20-25工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第16次調査(S K2009-16)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成21年6月2日～6月9日(実働6日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約54m²である。
1. 現地調査には、梶本潤二・芝崎和美・竹田貴子・田島宣子・中浜輝志・西出一樹の参加を得た。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、土器実測を芝崎・永井律子が、その他を坪田が行った。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。

本　文　目　次

1.はじめに.....	·11
2.調査概要.....	·12
1) 調査の方法と経過.....	·12
2) 基本層序.....	·12
3) 検出遺構と出土遺物.....	·12
3.まとめ.....	·15

III 木の本遺跡第16次調査(S K2009-16)

1. はじめに

木の本遺跡は八尾市南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯、現在の行政区画では木の本1～3、南木の本2～9、空港1丁目がその範囲とされている。地理的には河内平野の南西部、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置し、東側に田井中遺跡・老原遺跡、西～南側には八尾南遺跡・太田遺跡が隣接する他、北側には太子堂遺跡・植松遺跡・植松南遺跡といった平野川流域に展開する遺跡群が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和56(1981)年に八尾市教育委員会が南木の本4丁目で実施した試掘調査で、弥生時代中期前半～古墳時代後期の遺物包含層が確認されたことによる。そして続く発掘調査では弥生時代中期前半、古墳時代前期・中期の遺構が検出された。昭和57・58(1982・1983)年度には、八尾空港内の整備事業に伴い、当研究会が第1次調査を実施し、平安時代の条里水田の広がりが確認された。その後も八尾空港北側の昭和沢の川・平野川の河川改修工事に伴う調査や、下水道工事等に伴う小規模な調査が大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会により継続的に実施され、当遺跡は弥生時代前期以降の複合遺跡であることが確認されている。



第1図 調査地位位置図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南木の本三丁目地内で実施した公共下水工事(20-25工区)に伴う調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第16次調査(S K 2009-16)である。調査地は立坑部分(規模約7.6×7.6m)1箇所で、面積は約54m²を測る。

調査は現地表(T.P.+10.2~10.5m)下約2.3mからの開始である。現地表下約3.7m(T.P.+6.6m)までは機械・人力掘削を併用し、平面的には第1~3面の3面について調査を実施した。その後、工事掘削深度である約T.P.+3.8mまでについては、重機掘削に立会い、また地層の確認を行った。

調査では工事使用の仮BM5:T.P.+10.453mを標高の基準とした。

2) 基本層序

1~25層の層序を確認した。なお14層以下は、調査地南東部での下層調査で確認した。1~4層は粘土~シルト質粘土を基調とし、植物遺体や炭酸鉄を含む湿地性の層相である。上面(約T.P.+8.2m)が第1面である。5層は粘土質シルト~中粒砂の互層からなる洪水砂である。2~5層は南に向かって高くなる堆積で、南部に自然堤防の形成が想定できる。6~9層は粘土層で、炭酸鉄や、ラミナ状に植物遺体を含む湿地性の層相である。6層上面(約T.P.+7.2m)が第2面である。10~11層は暗色を呈する土壤化層で、上面(約T.P.+6.8m)が第3面である。10層は部分的に見られ、第3面の遺構埋土にもなっている。12~14層はシルト~中粒砂からなり、西に流心をもつ河川堆積と考えられる。15層はラミナ状に植物遺体を含む湿地性の層相。16層は細粒砂~粗粒砂からなる洪水砂である。17~24層は粘土を基調とする湿地性の層相である。25層はシルト~粗粒砂からなる流水堆積である。

3) 検出遺構と出土遺物

〈第1面〉

立坑内の支保工のため、調査開始時には地表面は荒れて上部が泥状であり、これを除去した面で調査を実施した。

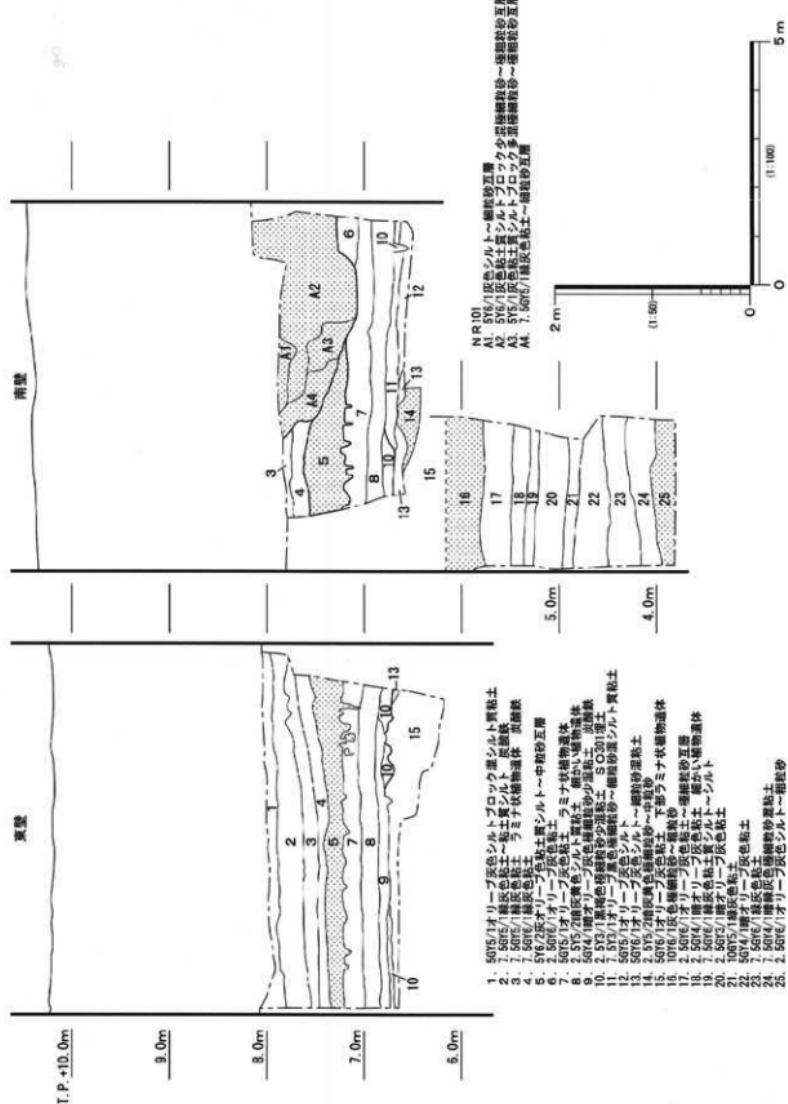
N R 101

調査区西半で検出した北西~南東方向の自然河川である。東肩を検出したもので、規模は幅4.0m以上・深さ1.1m以上を測る。調査開始時点ですでに上部は掘削されていたため、本来の構築層は1層より上位である。埋土は上部がシルト~細粒砂互層、下層が極細粒砂~極粗粒砂互層で、下層には削り取られたベース層である粘土質シルトのブロックが多く含まれる。当河川は、調査地東側を北流する平野川改修に伴う調査において、南東約50mで検出されているN R-001に繋がるものと考えられる。N R-001はほぼ東西方向に検出されており、その後北に流向を変えているものと考えられる。

遺物は弥生土器や平安時代頃までの土師器・須恵器片が出土しているが、いずれも著しく磨耗

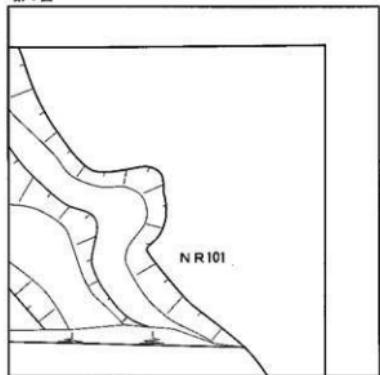


第2図 調査区位置図

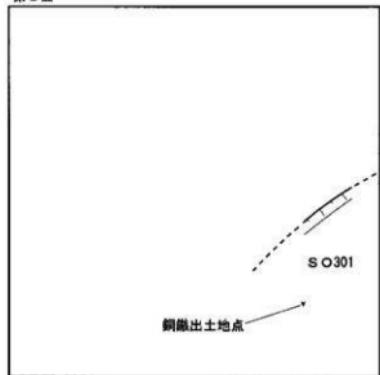


第3図 東壁・南壁断面図

第1面



第3面

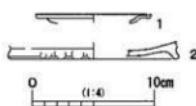


第4図 平面図

している。1・2を図化した。1は「て」の字口縁の土師器皿で、時期は10~11世紀に比定される。2は高台を有する土師器杯、あるいは皿で、奈良時代に比定される。

〈第2面〉

洪水砂である5層を除去した6・7層上面にあたり、標高は約T.P.+7.2mを測る。5層で充填されたヒトの足跡状の窪みが南部で多く見られた。



第5図 NR101出土遺物

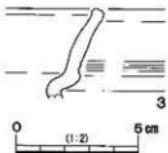
〈第3面〉

土壤化層である10・11層上面(約T.P.+6.8m)が第3面である。

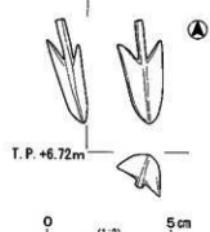
S O 301

調査区南東部で検出した。北東-南西方向の肩から南に浅く落ち込み、深さは約10cmを測る。埋土は基本層序の10層である。

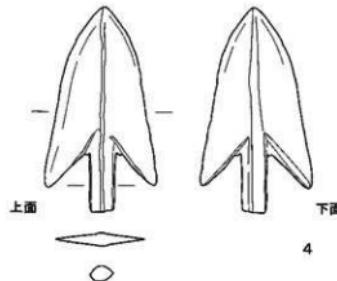
遺物は土器では土師器細片2点のみで、3を図化した。複合口縁の壺、あるいは鉢で、口縁部外面に擬凹線を巡らせている。形態的に山陰系と考えられ、時期は古墳時代初頭～前期に比定される。他に銅鏡1点(4)が出土した。出土状況は、切先を南に向け、底面に貼り付く状況であった。茎端部が欠損しているが遺存状態は良好で、法量は残存長42.24mm・鏡身長36.98mm・鏡身幅22.80mm・鏡身厚2.67mm・茎部幅5.12mm・茎部厚3.10mm・重さ6.55gを測る。逆刃の発達した凹基式に分類され、明瞭ではないが鏡部がやや隆起しており、有翼鏡にあたると思われる。時期は弥生時代後期～古墳時代前期と考えられる。



第6図 S O 301出土遺物①



第7図 銅鏡出土状況図



第8図 S O 301出土遺物②

3.まとめ

調査では第1面で自然河川N R 101、第3面で落ち込みS O 301を検出した。

N R 101は出土遺物からみて平安時代頃まで機能していたと考えられる。

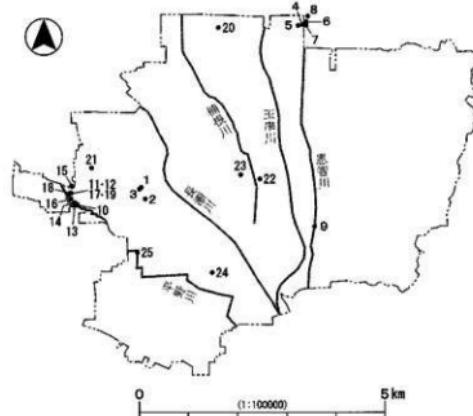
S O 301は古墳時代初頭～前期に帰属すると考えられる。同時期の遺構は南約80mで検出されているが、遺構面は北に向かって下がっているとようで、集落の北端にあたると考えられている。当調査地は当該期の集落域からは外れていると思われる。当地の地層は河川堆積や湿地性堆積の連続であり、層中からの遺物は皆無であった。当地は基本的に居住地には適していなかったといえる。

S O 301からは遺存状況の良好な銅鏡が出土した。銅鏡は八尾市域(一部、隣接する大阪市・東大阪市域を含む)でこれまでに24点が出土しており、本例を含めて25点となった。出土地では西部の亀井遺跡・跡部遺跡、北部の池島・福万寺遺跡に集中しており、その他は散発的となっている。

表1 八尾市内出土銅鏡一覧表

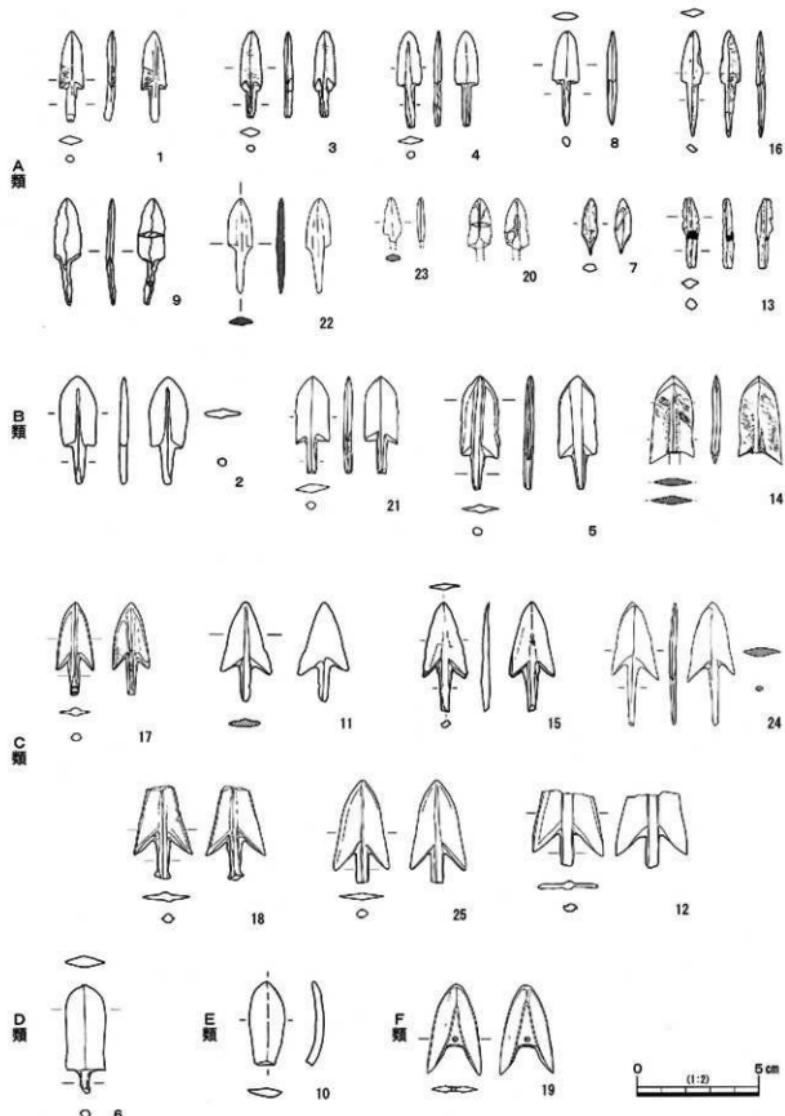
番号	遺跡名	出土地点	時代・時期	法量(cm、g)						銅身幅 指標	型式	文献	
				全長	銅身長	銅身幅	銅身厚	茎長	茎厚				
1	蓋部	頭經理的塙	弥生後期	3.7	2.35	0.9	0.4	1.3	0.3	—	38	凹基式	1
2		溝SD101	弥生後期	4.4	2.85	1.5	0.4	1.6	0.3	—	53	凹基式 右翼鏡	2
3		溝SD-3	弥生後期後半	3.5	2.4	0.9	0.3	1.0	0.3	—	38	凹基式	3
4	池島・ 福万寺	包含層	弥生	4.0	2.3	1.0	0.35	1.7	0.3	—	43	平基式	4
5		第9a層以上 ～古墳初頭	弥生後期	4.6	3.35	1.6	0.35	1.25	0.35	6.3	47	凹基式 有翼鏡	5
6		53ピット	古墳初期	4.4	3.5	1.6	0.5	1.0	0.3	10.2	48	平基式	6
7		第7層	—	2.3	1.65	0.6	0.35	0.65	—	1.5	36	凸基式	6
8		30落ち込み	古墳初頭	3.85	2.05	1.07	0.31	1.8	0.35	3.8	52	平基式	6
9		自然河道SD21	—	4.35	2.65	1.05	0.3	1.7	0.2	3.6	40	凸基式	7
10		土坑SK3004	弥生・後期	(3.4)	—	1.4	0.35	—	—	—	—	凹基式?	8
11		VIIb層	弥生・後期	4.2	3.0	2.2	0.3	1.5	0.3	—	73	凹基式 有翼鏡	9
12		VIIc層	弥生中期後半～ 後期	(3.1)	—	3.0	0.3	1.3	0.35	—	—	凹基式 有翼鏡	10
13	龜井	117-O.S上層	弥生・後期	(2.9)	—	—	0.4	1.2	0.4	—	—	凹基式 右翼鏡	11
14		排水内	弥生	(3.6)	3.6	1.8	0.3	—	—	—	50	凹基式 有翼鏡	12
15		SD2705	弥生・後期	4.5	3.1	1.85	0.25	1.8	0.3	4.65	60	凹基式	13
16		18区第13層	弥生・中期後半～ 後期	4.35	2.2	0.9	0.35	2.2	0.3	3.7	41	平基式	13
17		22区第7層	弥生中期後半～ 後期	3.8	2.8	1.55	0.35	1.6	0.3	3.8	55	凹基式 有翼鏡	10
18		21区第2層	弥生中期後半～ 後期	3.8	—	2.5	0.4	1.5	0.4	5.85	—	凹基式 有翼鏡	10
19		SK2202	弥生中期後半	3.7	3.7	2.2	0.4	—	—	4.9	59	無翼式 凹基式	10
20	萱板	第7層	弥生・後期	(2.1)	2.1	1.0	0.2	—	—	—	48	平基式	14
21	久宝寺	751堅穴住居	古墳初頭～ 前期	4.0	2.8	1.4	0.35	1.4	0.4	—	50	凹基式	15
22	小阪合	土坑(堅穴住居?)	弥生・後期	3.9	2.0	1.0	0.35	1.9	0.3	—	50	凸基式	16
23		土器窪SW1	古墳初頭	(3.2)	—	—	—	—	—	3.2	—	凸基式?	17
24	田井中	第19層	弥生・後期	5.0	3.2	1.9	0.4	2.4	0.2	—	64	凹基式	18
25	木の本	SO301	弥生・後期	(4.22)	3.70	2.28	0.27	(2.18)	0.31	6.55	62	凹基式 有翼鏡	本書

＊報告書に法量の記載が無いものについては掲載図より計測した。



第9図 八尾市域銅鏡出土地点

III 木の本遺跡第16次調査(S.K.2009-16)



第10図 八尾市域出土銅鏃集成図

時期的には弥生時代後期が中心で、10点が出土している亀井遺跡では、弥生時代中期に遡るものも見られる。ここでは形態的にA～F類の6種類に分類して掲載した。A～E類は有茎式、F類は無茎式である。

A類は細身のいわゆる柳葉状のものである。基部形態は凹基式(1・3等)、平基式(4・8等)、凸基式(9・22等)のいずれもが見られる。鎌身幅指数は36～52(平均42.9)。

B類はA類よりも鎌身幅が広く、また鎌身両側の刃がほぼ平行するもの。いずれも基部形態は凹基式であろう。鎌身幅指数は47～53(平均50.0)。

C類は逆刺が発達し、鎌身幅はB類よりもさらに広くなる。基部は明瞭な凹基式で、鎌身幅指数は55～73(平均62.8)。本例はこのC類にあたるが、法量的にみて亀井(12)に次ぐもので、最も大きい部類に属するといえる。

D類は刃がやや内湾するもので、いわゆる团扇形に近い形状である。基部は平基式。池島・福万寺の一例(6)のみである。鎌身幅指数は48。

E類は鎌身の中央部が膨らむもの。基部が欠損しており詳細は不明。B類とした跡部(2)も鎌身中央が膨らんでおり、こちらに含まれるかもしれない。

F類は無茎式で、亀井の一例(19)のみである。鎌身幅指数は59。この特徴的な形態は、丹後半島を中心とする日本海地域に見られるようである。

形態別の分布状況をみると、A・B類にはあまり偏在が認められないのに対して、C類は亀井・跡部・田井中・木の本遺跡と、旧人和川の主流であった長瀬川左岸～平野川流域の遺跡群に集中しているといえる。

文献

- 1 安井良三・成海佳子・他1991「跡部遺跡発掘調査報告書 財団法人八尾市文化財調査研究会報告31」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 2 西村公助1997「I 跡部遺跡(第10次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告58」財団法人八尾市文化財調査研究会
- 3 原田昌則2004「II 跡部遺跡(第23次調査)」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告81」「財団法人八尾市文化財調査研究会
- 4 岸本道昭1988「86・3・87-1 調査区の調査結果」「池島遺跡発掘調査概要・III」大阪府教育委員会
- 5 畑 冨子・井上智博2002「池島・福万寺遺跡2 (財)大阪府文化財センター調査報告書第79集」「財団法人大阪府文化財センター
- 6 廣瀬時習・畔内暢子・市村慎太郎2007「池島・福万寺遺跡3 (財)大阪府文化財センター調査報告書第158集」「財団法人大阪府文化財センター
- 7 田代克己・他1982「恩智遺跡」瓜生堂遺跡調査会
- 8 寺川史郎1980「亀井・城山」財団法人大阪文化財センター
- 9 高島 徹・他1982「亀井」財団法人大阪文化財センター
- 10 三好孝一1993「第IV章 第6節 金属器」「河内平野遺跡群の動態VI」大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 11 森井貞雄1994「1992・1993年度 亀井遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
- 12 宮崎泰史1984「亀井遺跡II」財団法人大阪文化財センター
- 13 秋山清三1986「第5章 第2節D その他の遺物」「亀井(その2)」大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 14 原田昌則1996「III 蓼振遺跡(第13次調査)」「蓼振遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告52」「財団法人八尾市文化財調査研究会

III 木の本遺跡第16次調査(S.K2009-16)

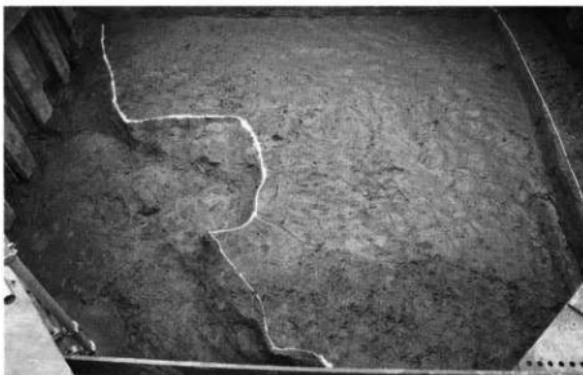
- 15 西村 歩2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI』財団法人大阪府文化財センター
- 16 高萩千秋1990『小阪合遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告26』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 17 高萩千秋1987『小阪合遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告11』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 18 荒川和哉・成海佳子・古川晴久2007「I 田井中遺跡(第14次調査)」「田井中遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告100」財団法人八尾市文化財調査研究会

参考文献

- ・田中勝弘1989「銅鑼」『季刊考古学第27号 青銅器と弥生社会』雄山閣
- ・荒川和哉・成海佳子・古川晴久2007「I 田井中遺跡(第14次調査)」「田井中遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告100」財団法人八尾市文化財調査研究会
- ・岩瀬 透・横田 明1999『木の本遺跡発掘調査概要・IV - 1級河川平野川改修工事に伴う発掘調査-』大阪府教育委員会



調査地(南から)



第1面(南から)



NR 101(北東から)



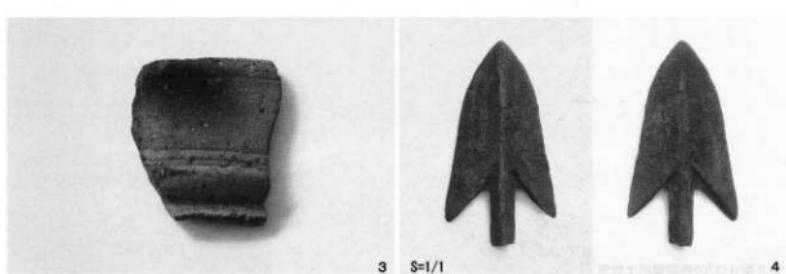
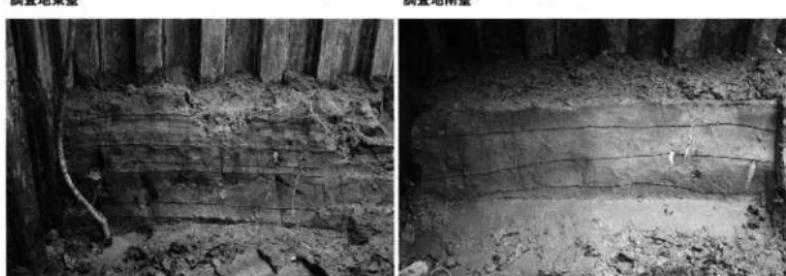
第2面(西から)



第3面(西から)



第3面SO301内銅鏡出土状況



IV 木の本遺跡第17次調査(S K2009-17)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市南木の本町三丁目地内で実施した公共下水道工事(平成21年度八尾排水区第32工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する木の本遺跡第17次(S K 2009-17)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第370号 平成21年10月14日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成21年12月4日～12月29日(実働3日間)にかけて、高萩千秋を調査担当者として実施した。調査面積は約12m²である。
1. 現地調査には、梶本潤二・西出一樹・田島宣子の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は高萩が行った。

本　文　目　次

1.はじめに.....	23
2.調査概要.....	23
1) 調査方法と経過.....	23
2) 基本層序.....	23
3) 検出遺構と出土遺物.....	25
3.まとめ.....	25

IV 木の本遺跡第17次調査(S K 2009-17)

1. はじめに

木の本遺跡についての概要は、Ⅲ木の本遺跡第16次調査で記載しており、参照されたい。

この調査は、八尾市南木の本三丁目地内で行われた公共下水道工事(21-32工区)に伴うもので、当調査研究会が木の本遺跡内で実施した第17次調査(K H 2009-17)にあたる。調査区は人孔部分3箇所(東よりNo.4・No.8・No.11調査区)である。総面積は約12m²を測る。



第1図 調査位置図及び周辺図 (S = 1/2500)

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財指示書に基づき、現地表(T.P. + 10.6~10.8m前後)下1.5~1.8m前後までを機械掘削とし、以下現地表下2.4~2.7m(T.P. + 8.1m前後)までの地層については、重機と人力を併用した掘削を行った。各調査区では、地層状況および遺構・遺物の有無などの検出に努めた。

2) 基本層序

各調査区の基本層序について記す。なお、それぞれの調査区は東西に約60mから80mの間隔があり、層序の継続性は明確ではない。

No.4 調査区

第1層：盛土。層厚0.8m。北側に排水管あり。

第2層：N4/ 灰色粘質土。層厚0.05m。

第3層：5GY5/1 オリーブ灰色粘質土。層厚0.15m。砂礫を微量に含む。

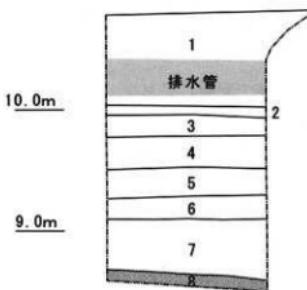
第4層：10GY6/1 緑灰色粘土。層厚0.25m。

第5層：7.Y6/2 灰オリーブ灰色粘土。層厚0.25m。近世以降の水田耕作土と考えられる。

第6層：7.5Y7/1 灰白色細砂混シルト。層厚0.2m。

T.P. +11.0m

北壁

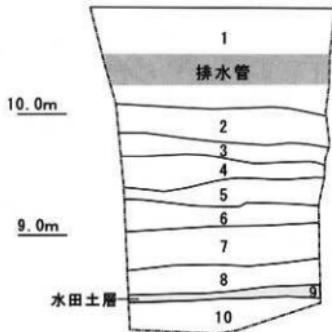


No. 4 調査区

- 1 盛土
- 2 N4/ 灰色粘質土
- 3 5GY5/1 オリーブ灰色粘質土
(砂礫を微量に含む)
- 4 10GY6/1 緑灰色粘土
- 5 7.Y6/2 灰オリーブ灰色粘土
- 6 7.5Y7/1 灰白色細砂混シルト
- 7 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト
- 8 5Y6/1 灰色細砂(自然河川?)

T.P. +11.0m

北壁

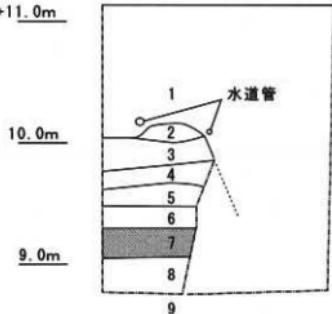


No. 8 調査区

- 1 盛土
- 2 10YR6/2 にぶい黄橙色
~5G6/1 緑灰色シルト
- 3 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂混シルト
- 4 2.5Y5/4 にぶい黄色細砂混シルト
- 5 10Y6/3 にぶい黄橙色粘質土
- 6 5G6/1 緑灰色粘土
- 7 5G7/1 明緑灰色シルト
- 8 2.5G4/1 暗オリーブ灰色粘土
- 9 2.5G5/1 オリーブ灰色細砂混粘質土
- 10 5G4/1 暗オリーブ灰色粘土

T.P. +11.0m

西壁



No. 11調査区

- 1 盛土
- 2 7.5YR7/1 明褐灰色細砂混粘質土
- 3 7.5YR6/4 にぶい褐色粘質シルト
- 4 7.5YR6/1 褐灰色粘質土
(砂礫を少量含む。水田土層)
- 5 7.5YR6/2 褐灰色シルト質
- 6 5G5/1 緑灰色粘質シルト
- 7 2.5Y7/2 灰黃色細砂
- 8 N5/ 灰色粘土

第2図 断面図 (S=1/40)

第7層：7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト。層厚0.4m。

第8層：5Y6/1 灰色細砂。層厚0.1m以上。自然河川？

No.8 調査区

第1層 盛土。層厚0.8m。

第2層 10YR6/3にぶい黄橙色～5G6/1緑灰色シルト。層厚0.25m。

第3層 2.5Y6/4にぶい黄色細砂混シルト。層厚0.15～0.2m。

第4層 2.5Y5/4にぶい黄色細砂混シルト。層厚0.1～0.25m。

第5層 10YG6/3にぶい黄橙色粘質土。層厚0.1～0.2m。近世の水田土層？

第6層 5G6/1緑灰色粘土。層厚0.15～0.25m。

第7層 5G7/1明緑灰色シルト。層厚0.3m。

第8層 2.5GY5/1暗オリーブ灰色粘土。層厚0.2m。

第9層 2.5Y5/1オリーブ灰色微砂混粘質土。層厚0.05m。中世の水田土層？

第10層 10GY暗オリーブ灰色粘土。層厚0.25m以上。

No.11 調査区

第1層 盛土。層厚0.5～1.5m。盛土及び既設工事(水道・ガス管)による埋め土である。調査区南西部は1.5mまで削平されている。

第2層 7.5YR7/1明褐色細砂混粘質土。層厚0.15m。

第3層 7.5TYR6/4にぶい褐色粘質土。層厚0.2m。

第4層 7.5YR6/2褐色細砂混粘質土。層厚0.15m。

第5層 7.5YR6/2褐色シルト質土。層厚0.1～0.15m。

第6層 7.5G緑灰色粘シルト。層厚0.15m。ほぼ水平堆積。

第7層 2.5Y7/2灰褐色細砂。層厚0.2m。ほぼ水平堆積。洪水層。

第8層 N5/1灰色粘土。層厚0.25m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

調査では、時期不明の土師片が含まれる層を確認したのみで、遺構は検出しなかった。出土した遺物(土器)も小片でごく微量であり、やや摩耗が見られる。このことから当地周辺は、水田等が広がる生産域と考えられる。

3.まとめ

調査では、中近世のものと考えられる水田土層が確認された。東側のNo.4 調査区では、標高9.2～9.3mの第5層が近世の水田土層、これより下の標高8.5～8.6m下の第8層が自然河川の堆積層と考えられる。No.8 調査区では、近世の水田土層(第6層)の下、標高8.4～8.5mの第9層も水田土層と考えられ、中世に遡る生産域と考えられる。

参考文献

- ・原出昌則・成海佳子・西村公助・米田敏幸 1984「木の本遺跡－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－」財団法人八尾市文化財調査研究会報告 4



No. 4 調査区北壁(GL0~-2.0m)



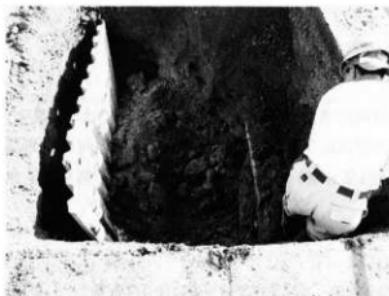
No. 4 調査区南壁(GL-2.0~-2.5m)



No. 8 調査区北壁(GL0~-1.5m)



No. 8 調査区北壁(GL0~-2.7m)



No.11調査区掘削状況(西から)



No.11調査区西壁(GL0~-2.5m)

V 久宝寺遺跡第75次調査(KH2009-75)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町地内で実施した公共下水道工事(20-22工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第75次調査(KH2009-75)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成21年5月8日～5月10日(夜間実働2日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約9m²である。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測を村井俊子、遺物トレースを市森千恵子が、その他を坪田が行った。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。

本 文 目 次

1.はじめに	27
2.調査の方法と経過	28
3.調査概要	28
4.まとめ	29

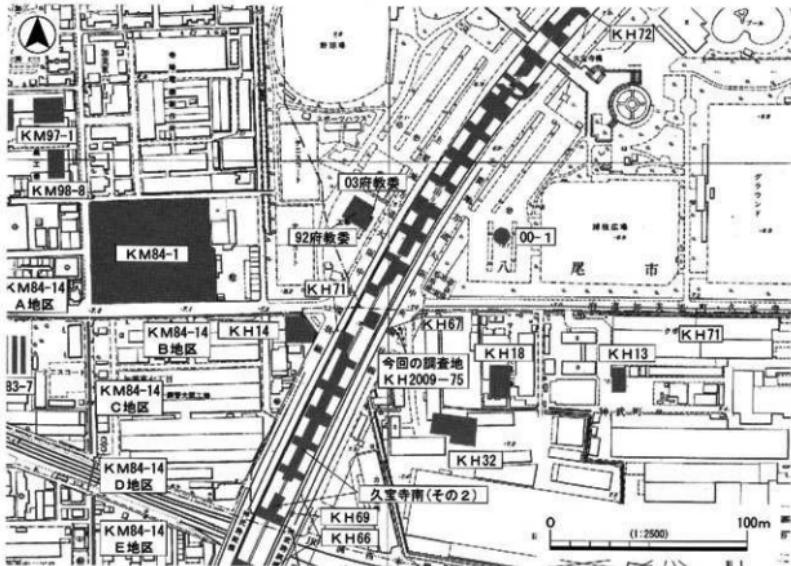
V 久宝寺遺跡第75次調査(KH2009-75)

1. はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺1～3、久宝寺1～6、西久宝寺、南久宝寺1～3、神武町、北龜井町1～3、龍華町1・2、渋川町1～7がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・龜井遺跡・太子堂遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5kmに及ぶ発掘調査が開始され、以降、大阪府文化財センター・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会において多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

今回の調査地周辺では、(財)大阪文化財センターによる久宝寺南(その2)、当調査研究会による第14・18・67・32次調査があり、古墳時代初頭～前期を中心とする多大な調査成果を得ている。久宝寺南(その2)での古墳時代初頭の準構造船の検出は特筆される。



第1図 調査位置図

2. 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市神武町地内で実施した公共下水工事(20-22工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第75次調査(KH2009-75)である。

調査地は人孔部分2箇所(北から1・2区)で、総面積は約9m²を測る。

1区は平面形が円形を呈するケーシング工法による人孔である。直径約2.5mの鉄枠を回転圧入により沈め込みながら内部の土を掘削する工法である。そのため通常の発掘調査は不可能と判断し、掘削の立会と、掘削土からの遺物採取を実施した。

2区は約2.0m四方の方形を呈し、矢板立て込みによる掘削である。調査は工事掘削深度である現地表(T.P.+7.4m)下2.5mまでを機械・人力掘削併用で行い、遺構・遺物の検出に勤めた。

なお調査はすべて夜間調査である。

3. 調査概要

〈1区〉

1区はケーシング工法のため、掘削の立会と主に掘削土からの遺物採取を実施したが、遺構・遺物は検出されなかった。

〈2区〉

・基本層序

0層はアスファルト・盛土。1層は旧耕土である。2~4層は搅拌されFe斑を多く含み、作土の可能性がある。5層はFe斑・Mn斑を多く含む土壤化層で、古墳時代前期までの土器を含む遺物包含層である。6層も搅拌された土壤化層で、数層に分層されると考えられる。弥生時代後期~古墳時代初頭頃の土器を少量含んでいる。上面(T.P.+5.45m)では土坑1基(SK1)を検出した。7層は細粒砂~粗粒砂の互層から成る水成層である。

・検出遺構と出土遺物

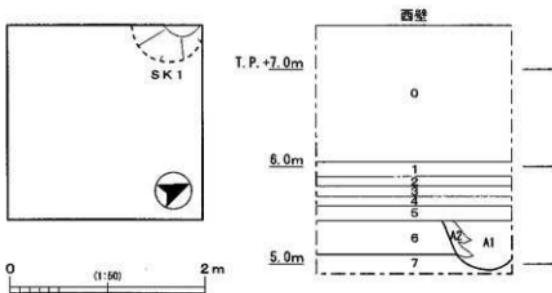
SK1

調査区北西角で検出した。直径70cm以上を測り、底部付近の様相から平面形は円形を呈すると考えられる。断面逆台形を呈し、深さは約50cmで、埋土はブロック状の2層(A1・A2層)からなる。埋土中には炭を多く含んでおり、このうちA2層は埋没過程の崩落土にあたると思われる。

遺物は古墳時代前期(布留式期古相)の土器が多く出土しており、1~3を図化した。1は精製



第2図 調査区位置図



- 0 : アスファルト・盛土
 1 : 2.5Gy/1贈オリーブ灰色粘土質シルト
 2 : 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
 3 : 5Y6/2灰オリーブ色細粒砂混粘土質シルト 搾拌 Fe斑
 4 : 2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト 搾拌 Fe斑
 5 : 10YR6/1褐灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト Fe斑 断面
 6 : 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混粘土質シルト 搾拌
 7 : 2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂

SK 1
 A1 : 2.5Gy/1贈オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト～シルト ブロック状 褐
 A2 : 7.5Y6/2灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト～シルト ブロック状

第3図 2区平断面図



第4図 2区SK 1出土遺物

の土師器有段高杯で、口径14.4cm・器高10.2cmを測る。調整は外面が口縁部ヘラミガキ、脚柱部面取り、裾部ナデ、内面は口縁部・裾部にハケを施す。脚部の三方向に円孔を穿ち、口縁部外面には黒斑を有する。2は庄内式壺である。外面のタクキは非常に細筋(7本/cm)で、下位にハケを加える。生駒西龍産の胎土である。3はV様式系壺で、調整は外面が体部タクキ、底部ナデ、内面がハケである。底部内面に黒斑を有する。壺では他に外面ハケ調整を施す布留式土器の破片も多く見られる。

4.まとめ

今回の調査では2区で古墳時代前期(布留式期占相)の遺構を検出した。調査地周辺は既往の調査成果からみて古墳時代初頭～前期を中心とする集落域であり、当地もその範囲に含まれることが確認された。



1区調査状況



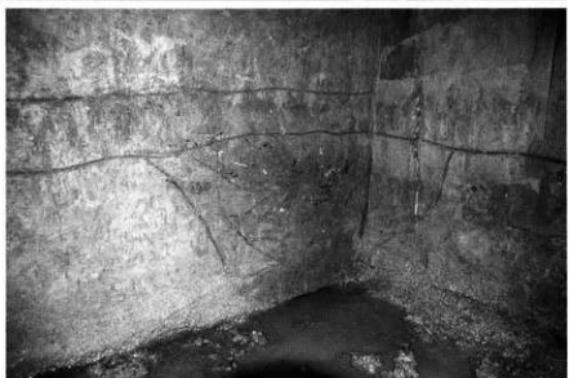
1区掘削状況



2区掘削状況



2区西壁



2区SK1



2区SK1土器出土状況



1



2



3

VI 郡川遺跡第9次調査(KR2009-9)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市教興寺五丁目地内で実施した公共下水道工事(21-16工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する郡川遺跡第9次調査(KR2009-9)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書(八教生文第378号 平成21年10月20日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成22年1月20日から1月27日(実働3日)にかけて、高萩千秋を調査担当者として実施した。調査面積は約36m²である。
1. 現地調査においては、梶本潤二・西出一樹の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、図面トレース、図面・写真レイアウト－高萩が行った。
1. 本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

1.はじめ	33
2.調査概要	33
1) 調査の方法と経過	33
2) 層序	34
3) 検出遺構と出土遺物	36
3.まとめ	36

VI 郡川遺跡第9次調査(KR2009-9)

1. はじめに

郡川遺跡は、八尾市東部に位置する、弥生時代中期からの複合遺跡である。現在の行政区画では郡川一～五丁目、教興寺一～七丁目、垣内一～四丁目、黒谷一～四丁目にあたる東西約0.8km、南北約0.9kmがその範囲とされている。当遺跡は、南北に縱断する東高野街道が走っており、古くから往来が盛んにあった地域である。現在は遺跡の西端に外環状線(国道170線)が主要道路となっている。

当遺跡の周辺には、東に高安古墳群、北に水越遺跡、南に恩智遺跡などの遺跡が展開している。この他、郡川遺跡内には教興寺跡の推定地として範囲を設定されている。当遺跡は大阪府教育委員会・市教育委員会・当調査研究会によって、数回の発掘調査が行われており、縄文時代から中世の遺構・遺物が検出されている。



第1図 調査区周辺図

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市教興寺五丁目地内で行われた公共下水工事(21-16工区)に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第9次調査である。調査区は、発進立抗部分1箇所(規模6.8m × 5.2mの面積36m²)である。調査では、一次掘削として現地表(T.P. +13.3m前後)下約1.5m前後を機械掘削し、以下0.6m前後の地層については慎重に人力及び機械による掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。また工事掘削深度までの地層についても確認できた。

2) 層序

現地表下5.8m (T.P. +6.3m 前後) の間で、23層の基本地層を確認した。第1層より上層は調査開始時には掘削が終了していたため不明であるが、近年の盛土や旧耕土等であろう。

第1層：盛土。層厚0.5cm。工事で整地した盛土と考えられる。

第2層：5Y6/2灰オーリーブ色シルト質土。層厚15cm。水平堆積で作土等の可能性が高い。

第3層：7.5Y5/3灰オーリーブ色シルト質土。層厚10cm。

第4層：7.5Y3/1オーリーブ黒色粘質土。層厚20cm。上面の標高は7.8m前後を測る。

第5層：7.5Y7/3浅黄色細砂。層厚0.05~0.1m。南西部に堆積する。

第6層：N2/1灰色細砂混粘質土。層厚0.15~0.2m。河川流路の沈殿層と考えられる。土師器・須恵器の小片をごく少量含んでいる。

第7層：10Y6/1灰色砂礫混細砂。層厚0.15~0.3m。河川堆積。

第8層：10Y5/1灰色細砂混シルト。層厚0.1m前後。河川の沈殿層である。

第9層：10Y7/1灰色微砂。層厚0.2m前後。

第10層：10Y7/1灰白色シルト。層厚0.3m前後。

第11層：7.5Y7/1灰色微砂混じりシルト。層厚0.2cm。河川堆積層である。

第12層：7.5Y5/1灰色砂礫混粗砂。層厚0.6m前後、5~10cmの礫と人頭大の河原石を少量含む。

第13層：暗青灰色砂礫混細砂。層厚0.15~0.3m。

第14層：暗青灰色細砂混シルト。層厚0.1m。

第15層：灰青色微砂混シルト。層厚0.3m。

第16層：暗青灰色礫混じり微砂。層厚0.2~0.3m。拳大の河原石と人頭大の河原石を含む。

第17層：暗青灰色シルト。層厚0.1~0.2m。

第18層：暗青灰色砂礫混細砂。層厚0.1~0.25m。

第19層：灰色粘質土。層厚0.2~0.25m。

第20層：暗青灰色粗砂混細砂。層厚0.05~0.15m。

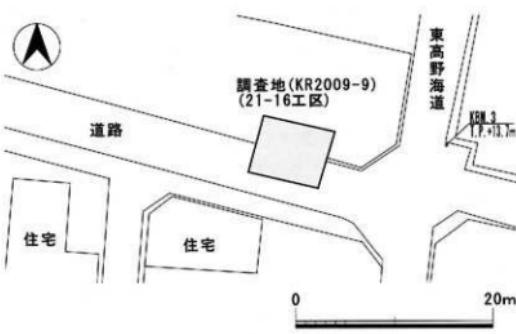
第21層：暗青灰色微砂混シルト。層厚0.2~0.3m。

第22層：黒灰色粗砂まじり粘質シルト。層厚0.4m。

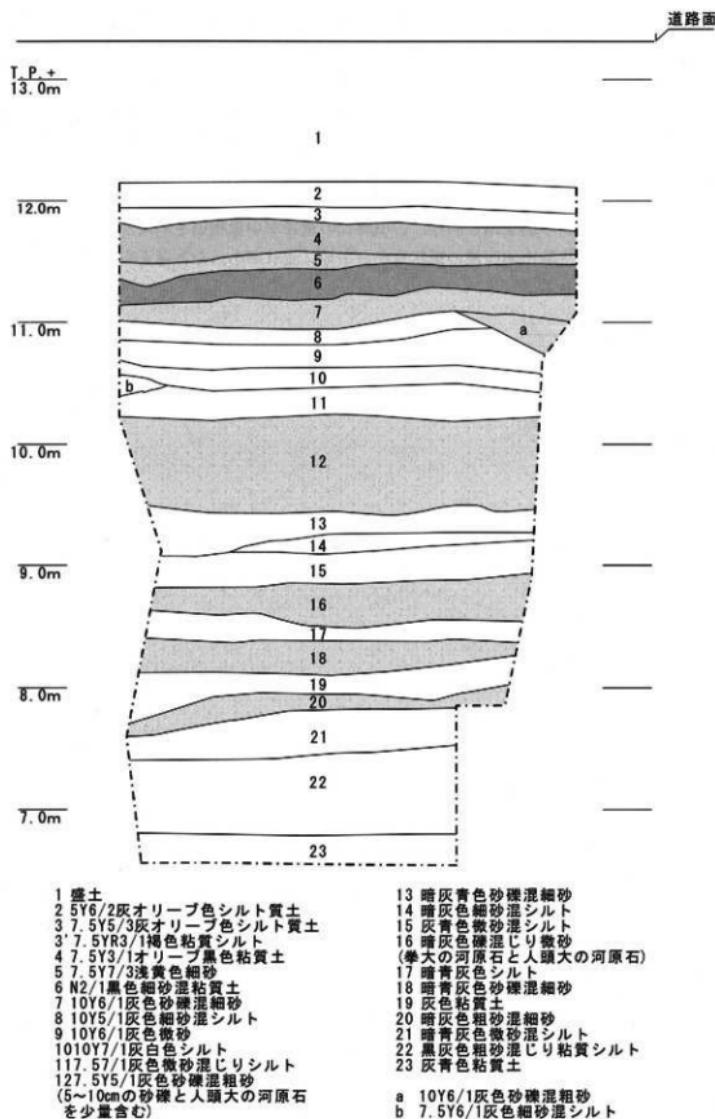
第23層：灰青色粘質土。層厚0.2m以上。粘着性がある。

a : 灰色砂礫混粗砂。

b : 灰色細砂混シルト



第2図 調査区位置図 (S=1/500)



第3図 北壁断面図 (S=1/40)

3) 検出遺構と出土遺物

調査では、遺構の検出はなかった。第6層内から古墳時代中期～後期頃の土師器・須恵器の小片が出土しているが、包含している量は非常に少ない。また、下層では、自然河川と思われる砂層を検出しており、生駒山地西麓から流れてきた人頭大の河原石が混入した細粒砂～粗粒砂が厚く堆積している。

3　まとめ

今回の調査では、近隣の調査地と同様、古墳時代の遺物が少量検出されたが、遺構等は検出されなかった。調査地は生駒山地西麓の扇状地から平地に流れがあったと考えられる河川の流路部分にあたるものと思われる。



調査対象面全景(西から)



東壁断面[TP+11~12m]



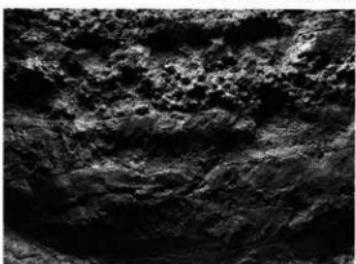
北壁断面[TP+9~12m]



記録図面作成(南から)



北壁断面[TP+8~9m]



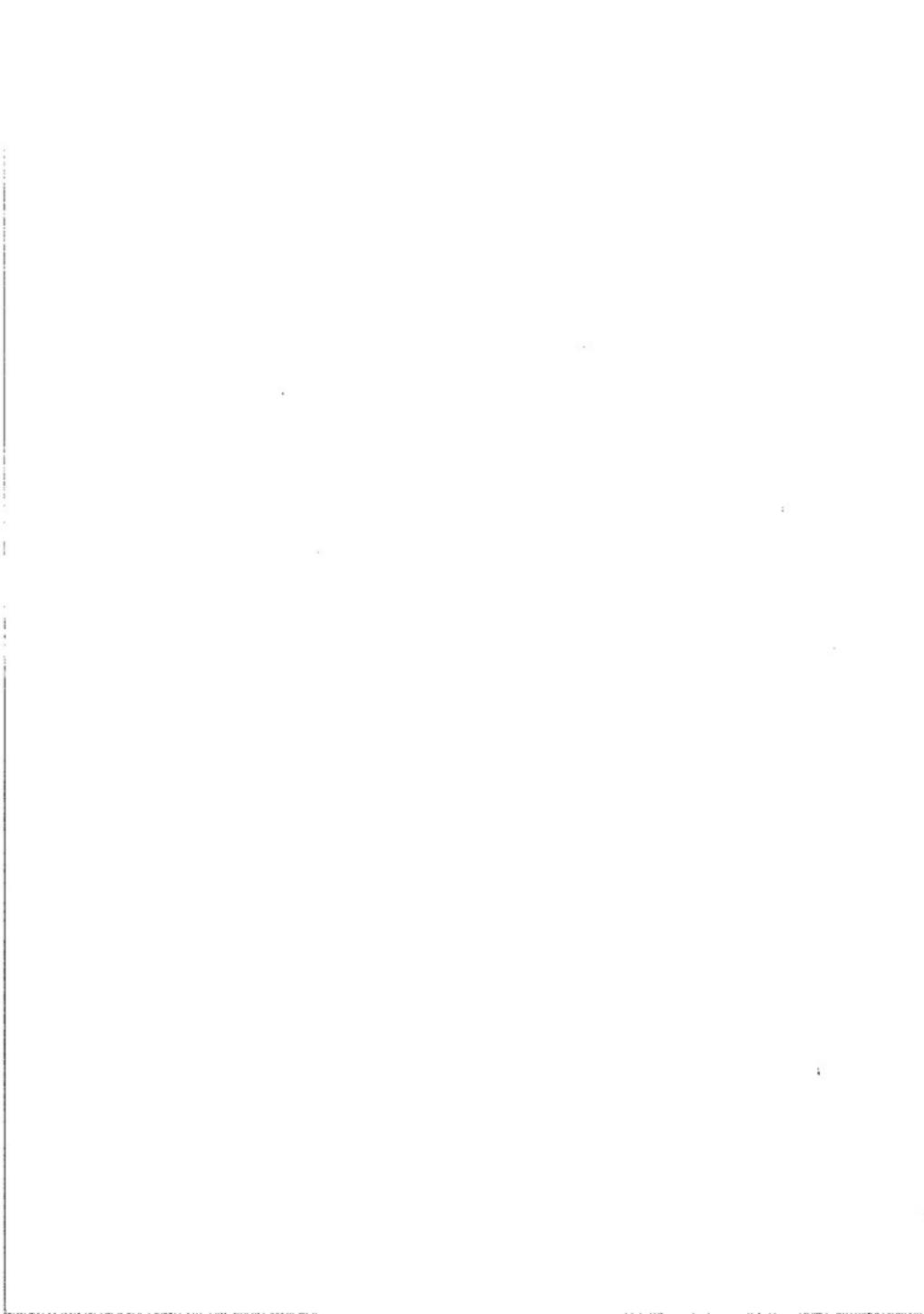
北壁断面[TP+7~8m]



下層掘削状況(南から)



最終工事掘削面[TP+6.6m](南から)



VII 成法寺遺跡第21次調査(S H2009-21)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市明美町一丁目、松山町一丁目地内で実施した公共下水道工事(平成20年度八尾排水区第21工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第21次(S H2009-21)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第38号 平成21年4月16日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成21年7月21日～8月7日(実働5日間)にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約84m²である。
1. 現地調査には、飯塚直世・市森千恵子・岩本順子・芝崎和美的参加を得た。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手して平成23年3月をもって終了した。
　　遺物実測－芝崎、トレース－市森、遺物写真撮影－坪田真一
1. 本書の執筆・編集は成海が行った。
1. 調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

本 文 目 次

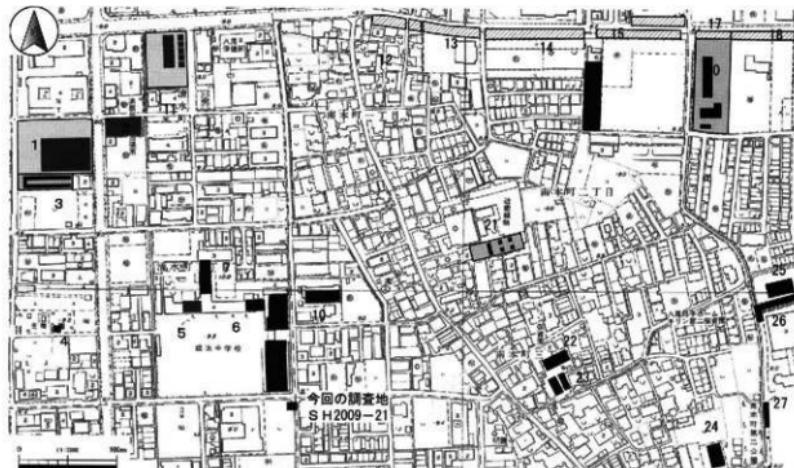
1.はじめに.....	39
2.調査概要.....	41
1)調査方法と経過.....	41
2)基本層序.....	42
3)検出遺構と出土遺物.....	42
3.まとめ.....	44

VII 成法寺遺跡第21次調査(S H2009-21)

1. はじめに

大阪府八尾市は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地に囲まれた大阪平野南東部に位置する。成法寺遺跡は市域の中央部に所在し、現在の行政区画では、光南町、陽光園一丁目、清水町、明美町一丁目、松山町一丁目、南本町一～四丁目、高美町一・二丁目の東西1km・南北0.6kmがその範囲にあたる。地理的には、南東から北西へと流下する玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。周辺には同様の立地条件で、北に東郷遺跡・東に小阪合遺跡・南東に中田遺跡・南に矢作遺跡などがあり、いずれも当遺跡同様弥生時代以降の複合遺跡である。また、北西には中世以降に成立する八尾寺内町、南西には古代寺院である龍華寺などが位置する。久宝寺遺跡・北に八尾寺内町などがある。

当遺跡発見の経緯は、昭和56(1981)年に八尾市教育委員会が1で実施した発掘調査で、弥生時代後期・古墳時代前期・同後期の遺構・遺物が確認されたことによる。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会による調査が断続的に行われ、多大な成果が得られている(第1図・第1表参照)。今回の調査地は市立成法中学校の南東部に接しており、当地北側の5～10で昭和56(1981)～平成3(1991)年にかけて行われた調査の結果、古墳時代前期から近世に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも古墳時代後期～奈良時代については、8で円筒埴輪・土馬、10で土器集積、9で建物や井戸などが検出され、居住域と墓域の存在が確認できている。また、当遺跡の中央部には、旧流路の自然堤防が南北に伸びており、12・21～24では中近世の集落が検出されている。



第1図 調査地周辺図

第1表 周辺の発掘調査一覧(番号は周辺図・文献と同一)

番号	略号等	所在地	調査期間	調査原因	主な調査成果
1	市S56-1	光南町一	1981/07~09	社屋	弥生後期:土器溝・土坑 古墳前期:方形周溝墓 古墳後期:掘立柱建物
2	市S59	清水町一	1984/07	事務所	古墳初頭:溝
3	SH89-5	光南町一	1989/10~11	共同住宅	弥生後期~古墳前期:土坑・溝:土器集積:方形周溝墓(土器棺:供獻土器) 古墳中~後期:溝:円筒埴輪棺 古墳後期:溝 中世:溝
4	SH98-17	光南町二	1998/09	防火水槽	近世:井戸
5	市S56-2	清水町二	1981/10~08	中学校校舎改築	古墳時代~中世:遺物包含層
6	SH82-1	清水町二	1982/06~07	中学校校舎増築	奈良:土坑:小穴:溝:落込み:近世:井戸
7	SH83-2	清水町二	1983/07~08	中学校校舎改築	古墳初頭:土坑:溝:奈良:掘立柱建物:土坑:溝
8	SH87-3	清水町二	1987/05~07	中学校体育館	古墳後期~奈良:(円筒埴輪・土馬) 奈良:掘立柱建物・穴・土坑・溝 織食:溝 近世:井戸
9	SH91-7	清水町二	1991/08~09	中学校プール	古墳前期:土坑・小穴:溝 飛鳥~奈良:掘立柱建物・井戸・土坑・小穴:溝 中世:溝 近世以降:溝
10	SH91-8	南本町二	1991/09~10	共同住宅	古墳後期~奈良初頭:溝(土器集積)・落込み 飛鳥~平安:土坑・溝 近世:溝
11	SH2010-22	清水町一	2010/	事務所	飛鳥:水田 平安:溝
12	府JHG93	南本町一	1993/07~	府道拡幅	中世以前:河川(弥生~飛鳥土器・墨書き上面器) 中世:迷跡・井戸・溝・石組遺構 中~近世:井戸・掘立柱建物・土坑(括抜業の土器・地錠?)・溝 近世:井戸(瓦・石臼)・小穴(土人形・足跡・泥面子)・焼土坑・溝
13	府H3-6	南本町一	1991/05~06	府道拡幅	古墳初頭~後期:足跡 中~近世:土坑(土輪) 溝(旧街道側溝?) - 杖列・塗施器・溜池・水溜め遺構 近世~近代:掘立柱迷跡・土坑・溝
14	府S60-1	南本町一	1985/11~12	府道拡幅	古墳初頭:井戸・土坑・小穴・溝 古墳初頭以降:円形周溝墓 中世以降:井戸・溝
15	府S61-2	南本町一	1986/07~10	府道拡幅	弥生中期:土器類 弥生後期以前:溝 古墳初頭~前期:堅穴住居・掘立柱建物・土坑・小穴・溝 河川 近世:溝
16	府TG093-1 (東郷遺跡)	東本町五		府道拡幅	古墳前期:土坑・溝
17	府S62-3	高美町一	1988/10~12	府道拡幅	弥生中期:方形周溝墓(土器棺・木棺・人骨) 弥生後期:溝・鞋形状盛土 古墳前期:堅穴住居・小型木棺墓 ? 土坑・小穴・溝 中世:溝 近代:大畦跡
18	府S63-4	高美町一	1989/09~10	府道拡幅	弥生末以前:河川 弥生末期:溝(=括抜業の土器)・土坑・小穴 古墳中期:堅穴住居・小型木棺墓 ? 土坑・小穴・溝 中世:溝 近代:大畦跡
19	SH88-4	南本町一	1988/11~12	事務所	古墳初頭:方形周溝墓・井戸・土坑・小穴・溝
20	SH2001-18	高美町一	2001/06~08	共同住宅	弥生中期:土器・石器 古墳初頭~前期:堅穴住居・土坑・溝
21	SH2007-20	南本町二	2007/11~12	共同住宅・事務所	中世:区画溝・堀 近世:島畠
22	SH94-15	南本町三	1995/04	社会福祉施設	鍵倉・室町:井戸・土坑・小穴・溝
23	SH94-13	南本町三	1994/04	社会福祉施設	鍵倉・室町:井戸・土坑・小穴・溝
24	SH90-6	南本町四	1991/02~03	共同住宅	室町中期:土坑・小穴・溝
25	SH93-12	高美町一	1994/03	公共下水道	弥生後期來:落込み 古墳中~後期:溝・古墳周溝 ? (須恵器・埴輪) 奈良:井戸(墨書き上面器)・溝 中~近世:異様溝
26	SH94-14	高美町二	1994/11~	公共下水道	弥生後期來:落込み 古墳中~後期:溝・古墳周溝 ? (須恵器・埴輪) 奈良後期~平安前期:河川(土器類・須恵器・土馬)

参考文献

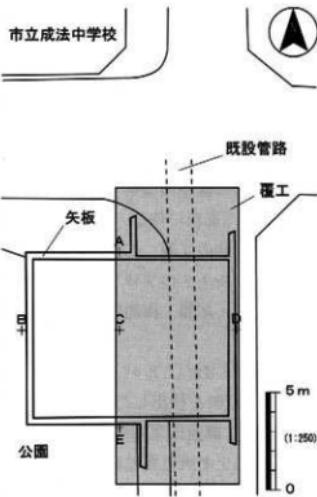
- 高萩千秋・米田敏幸他1983. 8 「成法寺遺跡」一八尾市光南町1丁目29番地の調査一』八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会
- 米田敏幸 1985. 3 「5. 成法寺遺跡の調査」『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告11 昭和59年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 坪田真一 1992「I 成法寺遺跡(SH89-5)」『八尾市文化財調査研究会報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告35 (財)八尾市文化財調査研究会
- 高萩千秋 2000「IX 成法寺遺跡第17次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
- 八尾市教育委員会 1983. 3 「付載 昭和55~56年度調査一覧表」『八尾市埋蔵文化財発掘調査 1980~1981年度』
- 原田昌則 1991「第2章 第1次調査(SH82-1)発掘調査報告書」『成法寺遺跡』
- 高萩千秋 1991「第3章 第2次調査(SH83-2)発掘調査報告書」『成法寺遺跡』

- 8 高萩千秋 1991 「第4章 第3次調査(S H87-3)発掘調査報告書」「成法寺遺跡」
- 9 坪田真一 1996.3 「I 成法寺遺跡(第7次調査)」「成法寺遺跡」
- 10 坪田真一 1996.3 「II 成法寺遺跡(第8次調査)」「成法寺遺跡」以上(財)八尾市文化財調査研究会
- 11 平成22年5~6月調査
- 12 中村清美 1994.3 「成法寺遺跡発掘調査概要・IV」
- 13 宮野淳一・西川寿勝 1992.3 「成法寺遺跡発掘調査概要・VI」
- 14 福田英人・米田敏幸・鶴村知子 1986 「成法寺遺跡発掘調査概要 I」
- 15 岩瀬透也 1987.3 「成法寺遺跡発掘調査概要・II」
- 16 中村清美 1994.3 「成法寺遺跡発掘調査概要・VII」
- 17 山上 弘 1989.3 「成法寺遺跡発掘調査概要・IV」
- 18 亀島重則 1990.3 「成法寺遺跡発掘調査概要・V」以上大阪府教育委員会
- 19 高萩千秋 1991 「第5章 第3次調査(S H88-4)発掘調査報告書」「成法寺遺跡」
- 20 森本めぐみ 2002 「17.成法寺遺跡第18次調査(SH2001-18)」「平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」
- 21 河村恵理 2009.3 「III 成法寺遺跡(第20次調査)」「(財)八尾市文化財調査研究会報告127」
- 22 西村公助 2006 「II 成法寺遺跡第15次調査(SH95-15)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告90」
- 23 西村公助 2006 「I 成法寺遺跡第13次調査(SH94-13)」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告90」
- 24 原田昌則 1991 「第6章 第6次調査(S H90-6)発掘調査報告書」「成法寺遺跡」
- 25 坪田真一 1994 「IX 成法寺遺跡第12次調査」「財團法人八尾市文化財調査研究会報告42」
- 26 坪田真一 1996.3 「III 成法寺遺跡(第14次調査)」「成法寺遺跡」以上(財)八尾市文化財調査研究会

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市明美町一丁目・松山町一丁目地内で行われた公共下水道工事(20-21工区)に伴うもので、当研究会が成法寺遺跡内で実施した第21次調査(S H2009-21)である。調査区は発進立坑部分1箇所(規模10.0×8.4m:面積84m²)で、四方を鋼矢板で囲まれており、東側は道路にあたるため、覆工板で覆われている。調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財指示書に基づき、現地表(T.P.+9.2m前後)下1.2m前後までを機械掘削とし、以下0.6m(T.P.+7.4m前後)までの地層については、機械・人力を併用した掘削を行い、遺構・遺物の有無などの検出に努めた。その結果、中~近世・奈良時代の遺構・遺物、当遺跡の基盤層である奈良時代以前の埋没河川を検出した。次いで、それ以下2.3m(T.P.+5.2m)を二次掘削として一部分機械で掘削し、下層の堆積状況を確認した。なお、工事による掘削深度は現地表下7.7m(T.P.+1.5m)までであったが、最終的には現地表下4m程度までしか確認していない。地層の確認は、工程上掘残しの出る部分に畦を設定したため、現地表下1.8m前後までは調査区中央東寄りの南北、それ以下は調査区北西隅である。



第2図 調査区周辺図

2) 基本層序

現地表下1.0m~4.0m(T.P.+5.2~8.2m)の間で13層を確認した。このうち、第7層以下が下層部分で確認した河川埋土である。

第1層：暗灰～褐色疊混粘土質シルト、2層上部に残存している。旧耕土と考えられる。

第2層：茶褐色粘土質シルト、層厚0.2m前後、酸化鉄・酸化マンガン等を含む攪拌された土壤で、作土と考えられる。この層上面を第1面とした。

第3層：茶褐色疊混粘土質シルト、層厚0.1~0.15m、第2層同様作土と考えられる。土器の極小片を少量含む。

第4層：明橙色砂質シルト、層厚0.15m前後、硬く締まる。この層上面を第2面とした。

第5層：灰色粗粒砂粘土質シルト、層厚0.1~0.15m

第6層：暗灰色粘土質シルト、層厚0.1~0.15m、植物遺体を含む。

第7層：灰色極細粒砂～粗粒砂、層厚0.6m前後、含水量の多い河川堆積層である。この層上面で、土師器高杯7、木片が極少量出土した。

第8層：暗灰色粘土質シルト、層厚0.2m前後、植物遺体を含む。

第9層：青灰色粘土、層厚0.2~0.3m、炭酸鉄を含む。

第10層：暗青灰色粘土、層厚0.3~0.4m、植物遺体を含む。

第11層：暗灰色砂質シルト～極細粒砂、層厚0.5~0.6m、含水量が多い。

第12層：褐色粘土、層厚0.2m前後、植物遺体を含む。

第13層：暗青色粘土、層厚0.2m前後まで確認した。炭酸鉄を含む。

3) 検出構構と出土遺物

今回の調査では、第2層上面で中～近世(第1面)、第3層上面で古墳時代～奈良時代(第2面)の遺構・遺物を検出した。

【第1面】

現地表下1.2m(T.P.+8.0m)前後の第2層茶褐色粘土質シルト上面で、近世の溝S D101を検出した。本来の構築面は第1層、またはそれ以上であろう。

S D101：東西に伸び、最大幅1.2m・深さ0.7を測る。埋土は①灰色粘土質シルト・灰色極細粒砂～粗粒砂の互層、②青灰色粘土質シルト・灰色粗粒砂の互層、③灰褐色粘土質シルト・茶褐色粘土質シルト・のブロック、④茶褐色粘土質シルト・灰色細粒砂の互層からなり、③から土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦などの小片が出土した。

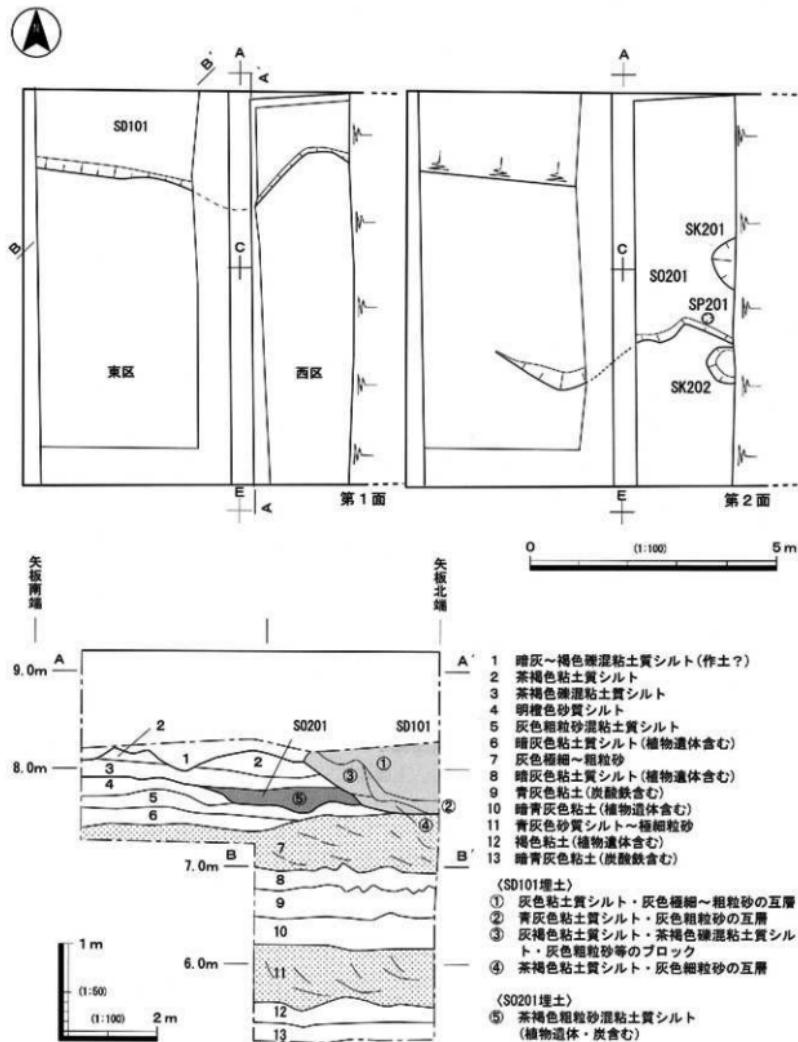
【第2面】

現地表下1.4m(T.P.+7.8m)前後の4層上面で、奈良時代の土坑S K201・202、小穴S P201、落込みS O201を検出した。

S K201：調査区東端中央部で、西側の約半分を検出した。径1.2m・深さ0.3mを測る。埋土は青灰色粘土と灰色粗粒砂のブロックで、底には礫が溜まる。井戸の可能性が高い。

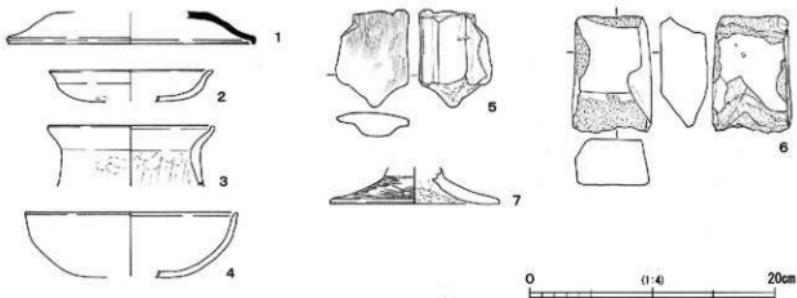
S K202：S K201から南1m地点で西側の約2/3を検出した。径0.85m・深さ0.1mを測る。埋土は茶褐色粘土質シルトである。土師器杯(2)が出土した。

S P201：S K201・202間の西寄りで検出した。径0.25m・深さ0.15mを測る。埋土は茶褐色粘土質シルト、須恵器杯(1)が出土した。



※断面図はT.P. +7.3m前後を境に、上層は中央セクション(A-A')、下層は北西セクション(B-B')との合成

第3図 平断面図



第4図 出土遺物実測図

第2表 出土遺物一覧表

番号	出土地	器種	法量(cm)	備考
1	S P201	須恵器杯蓋	口径 20.0	同軸ナデ
2	S K202	土師器杯	口径 13.2	ナデ・ヨコナデ、内面体部～外面口縁側面に煤付着
3	S O201	土師器甕	口径 13.4	口縁端部は巻き込む、内面ヘラケズリ
4	S O201	土師器鉢	口径 17.2	ナデ・ヨコナデ
5	S O201	土師器甕	5.9×8.0×1.9	甕口右側面の破片、継ハケ
6	S O201	砥石	6.4×9.6×3.8	表面2面に使用痕あり
7	7層上面	土師器高杯	標径 13.6	外面細かいヘラミガキ、内面ヘラケズリ、内面裾部～外面裾端部に黒斑

S O201：調査区南寄りで第4層が0.2m程度緩やかに下がるのを確認した。埋土は⑤茶褐色粗粒砂混粘土質シルトで、植物遺体・炭混ざる。土師器杯・甕・甕、砥石(3～6)等が出土した。

【出土遺物】

1は飛鳥時代後半(7世紀後半)の杯蓋である。2も同時期の土師器杯で、口縁部付近の煤は、燈芯油痕のようで、燈明皿としての使用が窺える。4はいわゆる「鉄鉢」の模倣の系譜を引く土師器杯で、飛鳥時代中頃(7世紀中頃)のものと考えられる。甕3・甕5は飛鳥～奈良時代(7～8世紀)のものであろう。土師器高杯7は第7層上面で検出したもので、これらより古く、古墳時代中～後期(5～6世紀)頃に比定できる。

3.まとめ

今回の調査では、既往調査同様、現地表下1.2m前後に中～近世、1.4m前後に飛鳥～奈良時代の遺構面の存在が確認できた。遺構面のベースは埋没河川で、この河川の埋没時期は、上面で検出した土師器高杯7から、古墳時代後期以降であることがわかった。下層部分では、河川・沼沢地の数回の変遷が確認できたことは多大な成果であるといえる。



調査地近景(南から)



中央セクション(北東から)



東区第1面掘削・精査(南から)



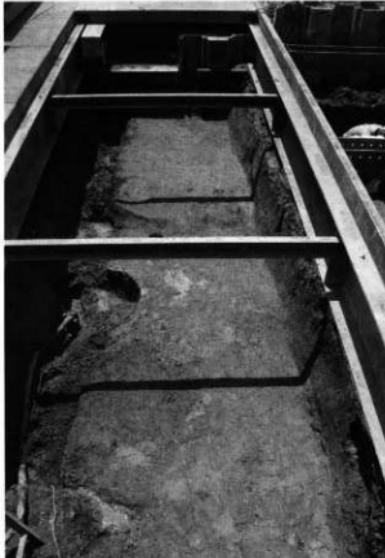
西区第1面SD10I掘削(北東から)



東区第1面全景(北から)



西区第1面全景(北から)



東区第2面(北から)



東区第2面平板測量(南西から)



西区7層上面遺物検出状況(西から)



下層北西セクション-1(T.P.+6.4~7.5m)



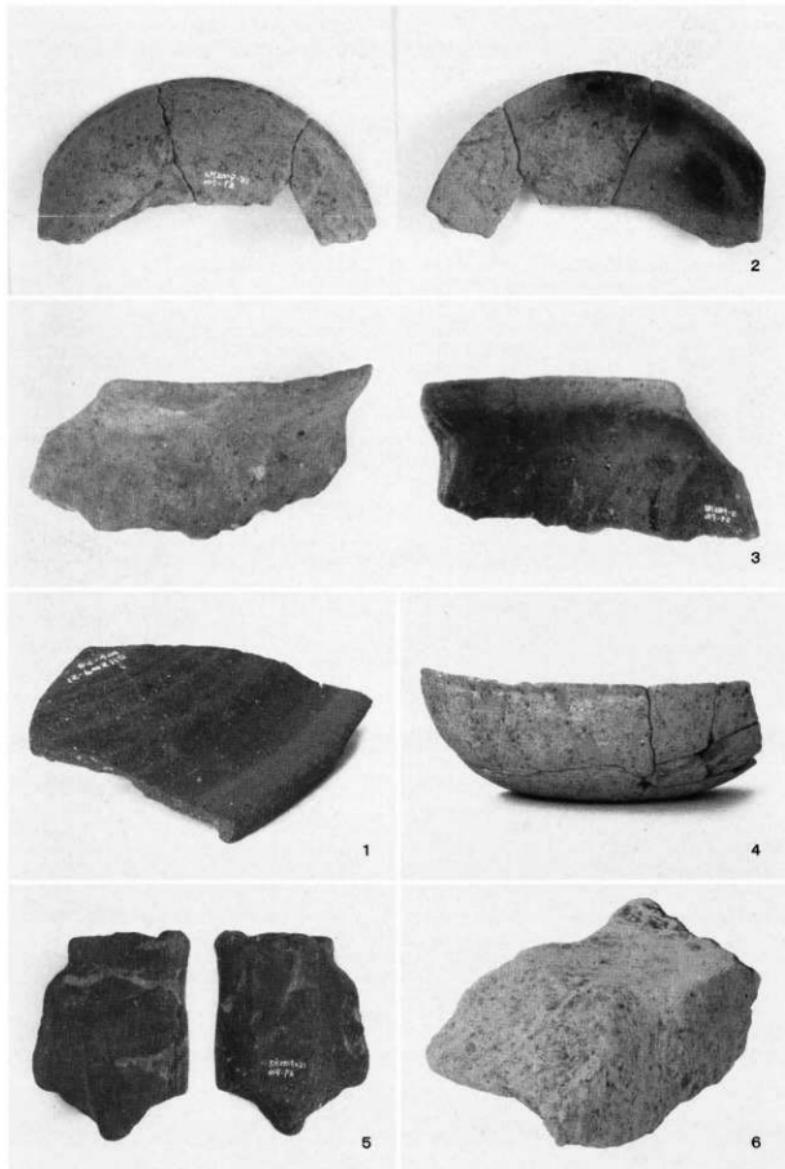
同左実測図作成(南西から)



下層北西セクション-2(T.P.+5.3~6.4m)



同左実測図作成(南から)



VIII 東弓削遺跡第17次調査(HY2009-17)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市都塚二丁目地内で実施した公共下水道工事(20-19工区)に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東弓削遺跡第17次調査(HY2009-17)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書(八教生文第458号 平成21年1月27日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成21年5月12日から6月2日(実働5日)にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約49.5m²である。
1. 現地調査においては、田島宣子・永井律子・中野一博・村井俊子の参加を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測-永井律子、遺物トレース-市森千恵子、図面・写真レイアウト-成海が行った。
1. 本書の執筆・編集は成海が行った。

本 文 目 次

1.はじめに.....	49
2.調査概要.....	51
1) 調査の方法と経過.....	51
2) 層序.....	51
3) 検出遺構と出土遺物.....	52
3.まとめ.....	55

VIII 東弓削遺跡第17次調査(H Y2009-17)

1. はじめに

東弓削遺跡は、八尾市南東部に位置する、弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾木、八尾木一～五丁目、八尾木東一～三丁目、東弓削、東弓削二・三丁目、都塚、都塚一～四丁目、刑部にあたる、東西約1.3km、南北約1.2kmがその範囲とされている。当遺跡は、河内平野を北～北西へ流下していた旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川が分岐する「二俣」地区北側の沖積地上に立地しており、この沖積地上には隣接する中田遺跡・矢作遺跡など多くの遺跡が展開している。この他、東側には玉串川の対岸に恩智遺跡・神宮寺遺跡、南側には長瀬川の対岸に弓削遺跡、西側には志紀遺跡・田井中遺跡・老原遺跡が位置している。

当遺跡発見の契機は、昭和42(1967)年の国道170号(大阪外環状線)敷設工事の際、縄文陶器等の土器類とともに瓦類が多量に出土したことにより、「続日本紀」にある「由義宮」「西京」の推定地にも隣接することから、当該地付近を弓削寺跡と推定されるに至った。その後昭和45～46(1970～1971)年の発掘調査では、遺跡中央部を南北に貫く調査地で、鎌倉時代の土器や瓦等の他、



第1図 調査区周辺図

古墳時代中～後期の土器や埴輪(石見型埴輪)、弥生時代中～後期の土器なども出土している(①)。

これまでの調査成果から、遺跡央部には古長瀬川から分岐して北西流する古墳時代の埋没河川(古楠根川?)があり、内部から弥生前期～古墳後期の土器が出土している。中央～北西部にかけてはおもに弥生時代中期～古墳時代中期の遺構・遺物が多く検出されており、南部の弓削寺跡付近では奈良時代～鎌倉時代の整地層や瓦等が出土している。また、遺跡北西辺では平安～鎌倉時代の遺構も検出されている。一方、今回の調査地周辺である東部では、平安時代の土器や鎌倉時代以降の水田等が検出されている(⑤・⑥・⑦)。

表1 周辺の調査地一覧表

*番号は文献と共に通

番号	略号	所在地	調査原因	主な検出遺構	主な出土遺物
①	—	八尾木～東弓削	公共下水道		古墳中～後期：土器類、須恵器、埴輪 弥生中～後期：土器
②	HY86-2	東弓削三	送電用鉄塔	鍾乳洞以降：水田 奈良～鎌倉：整地層	
③	93-298	八尾木東二・三	公共下水道	中世(14世紀)：溝状遺構 古墳後期：土器(杯・甕・高杯)、埴輪 弥生中期：土器(壺・水差し・無頸壺・蓋等)	中世(14世紀)：溝状遺構
④	98-572	東弓削三	個人住宅	中世：落込み 奈良～中世：瓦	中世：落込み
⑤	HY2000-11	八尾木東二	公共下水道	中世：水田作土 中世以前：溝	
⑥	HY2001-12	都塚	公共下水道	中～近世：作土 中世以前：河川	中～近世：回収磁器
⑦	2003-127	東弓削	店舗	鍾乳洞：水田	
⑧	2003-150	八尾木三	保育園建設		飛鳥：土器(杯・高杯・羽釜)
⑨	2003-239	都塚	通信用鉄塔	鍾乳洞以前：不明遺構	平安前期：土器器
⑩	HY2008-16	東弓削	公共下水道	中世以降：溝 平安：土坑 古墳中～後期：土坑・溝 古墳前期：土坑 古墳以前：河川	平安：瓦器類、瓦 古墳中～後期：土器器 古墳以前：土器器(壺・小型丸底壺・鉢形器台等)

- ① 山本 昭編 1976『東弓削遺跡』八尾市文化財報告3 八尾市教育委員会
- ② 西村公助 1987「9. 東弓削遺跡(第2次調査)」『昭和61年度事業概要報告』財団法人八尾市文化財調査研究報告14 (財)八尾市文化財調査研究会
- ③ 八尾市教育委員会 1995「6. 東弓削遺跡(93-298)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業
- ④ 清 章 2000「32. 東弓削遺跡(98-572)の調査」『八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告42 八尾市教育委員会
- ⑤ 高萩千秋 2001「VI 東弓削遺跡(第11次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告71』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑥ 成海佳子 2002「VI 東弓削遺跡(第12次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』同上
- ⑦ 西村公助 2003「32 東弓削遺跡(2003-127)の調査」『八尾市内遺跡平成15年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告49 平成15年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- ⑧ 河田清一 2003「33 東弓削遺跡(2003-150)の調査」同上
- ⑨ 西村公助 2003「34 東弓削遺跡(2003-239)の調査」同上
- ⑩ 米井友美 2009「IV 東弓削遺跡第16次調査(HY2007-16)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告129』(財)八尾市文化財調査研究会

2. 調査概要

1) 調査の方法と経過

今回の調査は八尾市都塚二丁目地内で行われた公共下水工事(20~19工区)に伴う調査で、当調査研究会が東弓削遺跡内で行った第17次調査である。調査地は発進立坑部分一箇所(規模7.66m × 6.46m面積49.5m²)で、四方を鋼矢板で囲まれており、南側が道路上のため覆工板に覆われていた。調査は1段目の腹起し設置後に開始したため、調査開始時には既に作土上面である(T.P.+11.8m)下約1.6m前後までの掘削が終了していた。

調査では、工程に従って1次掘削として現地表下約4.0m前後(T.P.+8.0m前後)までを機械・人力掘削を併用して掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、機械掘削終了面で、桶を積上げて井戸とするⅢ類(河内1992)の近世井戸2基(SE1・SE2)を検出した。いずれも上部は削平され、構築面は明らかではない。また、平安時代の遺構面を構成すると思われる地層(第6層)を検出した。

次いで、二次掘削として、工事による掘削範囲である現地表下約4.0~6.8m(T.P.+5.0m前後)までを機械・人力掘削を併用して掘削し、おもに下層部分の地層の観察に努めた。地層の確認は、現地表下約1.6m前後以下から、工程上掘残しの出る南側・西側に鞋を残して行った。

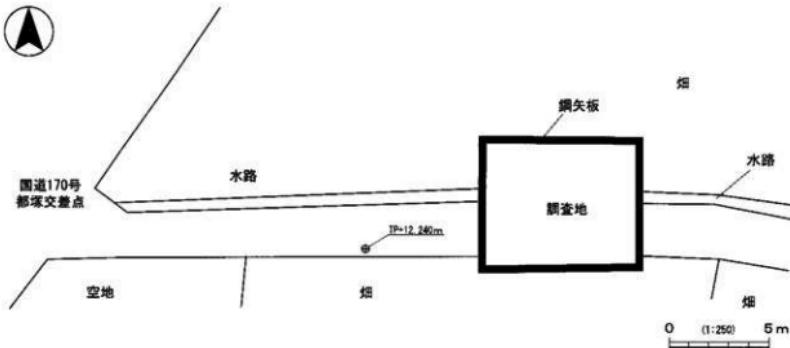
2) 層序

現地表下1.7m~4.5m(T.P.+5.0~10.1m)の間で16層を確認した。第1層より上層は調査開始時には掘削が終了していたため不明である。このうち、第1~5層までは、沼沢地状の堆積状況を示し、作土等の痕跡も認められなかった。第6~18層では、河川→沼沢地→河川と数回の変遷が見られ、第19層で河川底に至る。

第6層上面では、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての土器片が若干出土しており、当該時期の遺構面を構成すると考えられたが、遺構は検出されなかった。

第13層は近世井戸SE1・SE2の湧水層にある。

最下層の第19~21層は粘土質の堆積となり、河川底に当たるが、地盤改良の影響を受けたためか、固まっている。



第2図 調査地位置図

第1層：灰色細～中粒砂混粘土質シルト、層厚0.35m以上を測る。

第2層：青灰色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0.2m前後。

第3層：暗灰色粘土質シルト

第4層：青灰色粘土質シルト

第5層：灰色極細粒砂混粘土質シルト

第6層：灰色細粒砂、層厚0.1～0.9mを測り、調査区南西部が最も厚くなる。上面の標高はT.P. +9.1～9.3mを指し、南西が高く、北東が低い。上面は土壤化しており、土師器・瓦器等の小片が極少量出土している。

第7層：暗灰色極細粒砂混粘土質シルトと植物遺体の互層、層厚0.2～0.3m。

第8層：灰色砂質シルト～極細粒砂、層厚0.1～0.3m、植物遺体の小片をわずかに含む。

第9層：青色極細～粗粒砂の互層、層厚0.1～1.2mを測る。調査区中央以東では、下層の第10～12層をえぐって南東・北西に伸びており、一時期の流路を形成していたものと考えられる。

第10層：青灰色粘土質シルト・極細粒砂の互層、層厚0～0.1m前後。調査区中央以西では、第9層によってえぐられているため、以下の第12層までは堆積していない。

第11層：暗灰色粘土質シルト・極細粒砂・植物遺体の互層、層厚0～0.3m前後。

第12層：暗灰色粘土質シルト・粗粒砂・植物遺体の互層、層厚0～0.15m前後。

第13層：灰色粗粒砂、層厚0.4m前後。調査区西部では第9層との判別はしにくい。

第14層：暗オリーブ灰色粘土、層厚0.05～0.1m。細かい植物遺体を含む。

第15層：緑灰色粘土、層厚0.1～0.15m。

第16層：暗オリーブ灰色植物遺体混粘土、層厚0.2m前後。

第17層：暗オリーブ灰色細～中粒砂混粘土

第18層：灰オリーブ色細～粗粒砂、層厚1.6～1.7m。細縞を少量含んでいる。

第19層：青灰色粘土、層厚0.4m前後。上面の標高はT.P. +5.5m前後を測り、東下がりである。

第20層：オリーブ灰色シルト、層厚0.1m前後。

第21層：緑灰色粘土、層厚0.1m以上。

3) 検出遺構と出土遺物

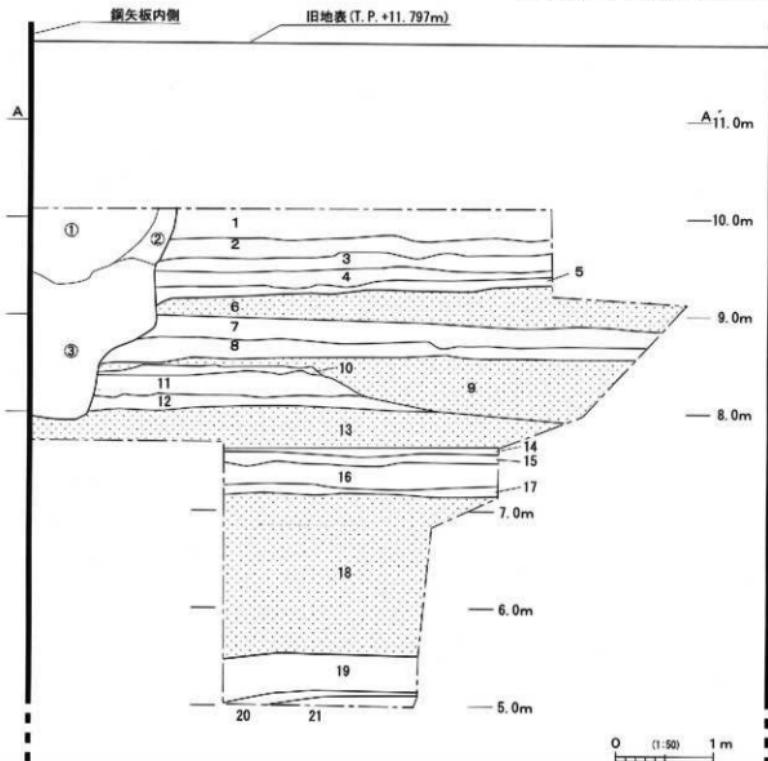
調査区南東隅・南西隅で2基の井戸を検出した。ともに桶を重ねた井側をもつもので、S E 1では最下の1段、S E 2では4段分が遺存していた。

井戸(S E)

S E 1

調査区南東隅で最下の井側を検出した。井戸掘形は、西側が広く、北～東へは狭くなっている、深さは10cm程度で井側に接している。井側は東下がりに歪んでおり、長径(東西)約0.8m・短径(南北)約0.7m・高さ0.8mを測る。

板材は26枚で1周し、上端から13cmの位置にタガが遺存していた。内部には、湧水層である第13層が堆積している。井戸掘形は南側壁面で部分的に検出したが、井側上部の施設は検出できなかった。掘形内部には、上から①灰色粘土質シルトと粗粒砂、②灰色粘土質シルトと黒灰色疊混



第1層	灰色細～中粒砂混粘土質シルト	第15層	緑灰色粘土
第2層	青灰色極細粒砂混粘土質シルト	第16層	暗オリーブ灰色植物遺体混粘土
第3層	暗灰色粘土質シルト	第17層	暗オリーブ灰色細～中粒砂混粘土
第4層	青灰色粘土質シルト	第18層	暗オリーブ細～粗粒砂(細礫少量混)
第5層	灰色極細粒砂混粘土質シルト	第19層	青灰色粘土
第6層	灰色細粒砂	第20層	オリーブ灰色シルト
第7層	暗灰色極細粒砂混粘土質シルトと植物遺体の互層	第21層	緑灰色粘土
第8層	灰色砂質シルト～粗粒砂		
第9層	青灰色極細粒砂～粗粒砂の互層	S E 1 捨形堆土	
第10層	青灰色粘土質シルト・極細粒砂の互層	①	灰色粘土質シルト・粗粒砂のブロック
第11層	青灰色粘土質シルト・極細粒砂・植物遺体の互層	②	灰色粘土質シルトと黒灰色疊混粘土質シルトのブロック
第12層	暗灰色粘土質シルト・粗粒砂・植物遺体の互層	③	青灰色粘土質シルト・粗粒砂～礫のブロック
第13層	灰色粗粒砂		
第14層	暗オリーブ灰色粘土(細かい植物遺体含む)		

第3図 南側壁面図

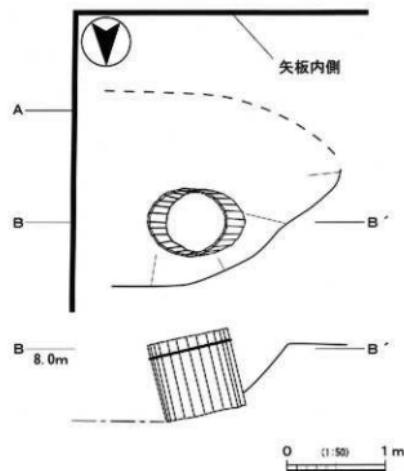
粘土質シルト、③青灰色粘土質シルト・粗粒砂～礫等からなるブロック層が堆積している。井側内部から肥前系の磁器碗1が、掘形内③層からは須恵器こね鉢2・土師器羽釜3・平瓦4が出土している。

磁器碗1はいわゆる「くらわんか手」の肥前系碗で18世紀後半(江戸時代後期)、須恵器こね鉢2は東播系のもの、土師器羽釜3・平瓦4などとともに、12世紀後半(平安時代末期)ころのものと考えられる。

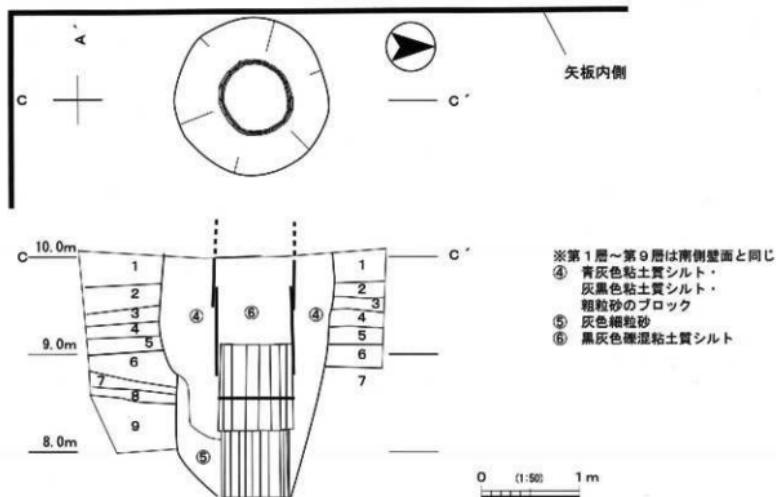
SE 2

調査区南西隅で検出した。井戸掘形はやや南側がやや広い円形で、最大径(南北)1.6m程度、深さ2.0m前後で、4段目の井側に接している。井側は4段分が遺存しており、それぞれ高さ約0.9mを測る。上3段分の井側は板材16～17枚で一周し、上下端部から25cm付近にタガが遺存していた。最下段の井側は板材28枚で1周し、上から18cm付近にタガが遺存する。

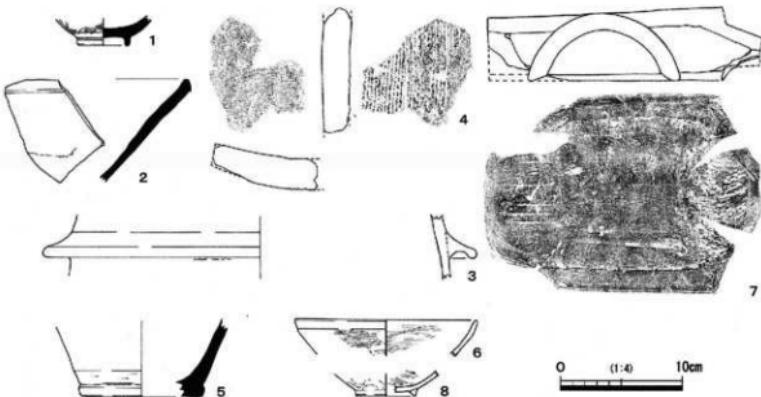
最上段の井側を復元すれば、T.P. +10.4m程度、現地表(作土上面)下1.4m程度まで遺存していたことが判る。掘形埋土は④青灰色粘土質シルト・灰黒色粘土質シルト・粗粒砂のブロック層、⑤灰色細粒砂が堆積する。井側内部には、3段目付近までは⑥黒灰色礫混粘土質シルト・粗



第4図 SE 1 平断面図



第5図 SE 2 平断面図



粒砂のブロック層で充填されており、最下はSE1同様、第13層灰色粗粒砂に至る。井側内部(3段目)からは須恵器こね鉢5・瓦器椀6・丸瓦7等が出土し、掘形最下からは瓦器椀8が出土している。

瓦器椀6・8はいずれもいわゆる和泉型瓦器椀で、12世紀前半(平安時代中期)ころに比定できる。須恵器こね鉢5は篠窯の可能性もあり、そうだとすると、12世紀前半以前のものと考えられる。丸瓦7は18世紀後半以降(江戸時代後期)のものであろう。

3.まとめ

今回の調査では、近世の井戸を2基検出することができた。上面がすでに掘削されていたことは残念でならないが、桶を重ねて井側とするものは、通常5~7段積み上げられている(河内1992)ことから、2基の井戸がそのような規模であれば、近年まで農事用の井戸として利用されていた可能性が高い。また、大和川付替え以降の河内平野における農事用井戸は、耕作地(島畠・搔揚げ田)の隣に位置することが多く、当該地もそのような位置に当っていたと考えることができる。

また、瓦器椀や須恵器こね鉢などの出土は、当地周辺に12世紀前半~中頃(平安時代中~後期)の集落の存在を示唆している。

参考文献

- ・山本 博 1971『竪田越』学生社
- ・河内一浩 1992「續・近世農耕井戸試考」「関西近世考古学研究Ⅲ」関西近世考古学研究会編
- ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・法隆寺昭和資料帳編集委員会 1992『法隆寺の至宝 第15巻―昭和資料帳一』小学館



南壁(T.P.+9.0~10.0m前後)



調査地近景(南西から)



南壁(T.P.+8.0~9.0m前後)



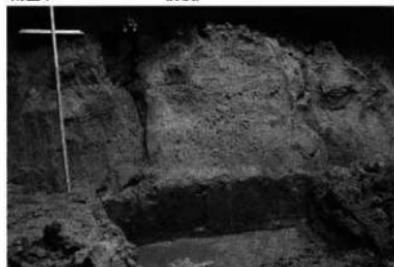
同左 実測状況(北西から)



南壁(T.P.+7.0~8.0m前後)



同左 実測状況(北西から)



南壁(T.P.+5.0~7.0m前後)



同左 実測状況(北西から)



S E 1周辺精査(西から)



同左 最下段井側検出(北から)



S E 2検出時(東から)



同左 上段断割り



同上 下段掘形・井側検出時(北から)



同左 平面実測(南東から)



同上 下段断割り



同左 最下段井側内掘削(東から)



IX 弓削遺跡第10次調査(Y G E 2009-10)

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市志紀町南四丁目地内で実施した公共下水道工事(21-28工区)に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する弓削遺跡第10次(Y G E 2009-10)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書(八教生文第369号 平成21年10月14日)に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成22年2月8日～4月30日(外業実働14日間)にかけて、成海佳子を調査担当者として実施した。調査面積は約64m²である。
1. 現地調査・内業整理には、飯塚直世・市森千恵子・芝崎和美・村田知子・永井律子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成23年3月に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-飯塚・村田、遺物図面トレース-市森、全体の編集は成海が行った。
1. 調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

本　文　目　次

1.はじめに.....	59
2.調査概要.....	59
1) 調査方法と経過.....	59
2) 平成21年度の調査.....	60
3) 平成22年度の調査.....	62
3.まとめ.....	62

IX 弓削遺跡第10次調査(Y G E 2009-10)

1. はじめに

弓削遺跡は、八尾市南東部の志紀町南二・三・四丁目、弓削町三丁目一帯に所在し、旧大和川の左岸の沖積地に位置する。周辺には西に田井中・志紀遺跡、北に長瀬川を挟んで東弓削遺跡・弓削寺跡、南に柏原市本郷遺跡が隣接している。本郷遺跡は、市域を異にしているだけで、当遺跡と同一の遺跡である。

これまでの調査では、当地の南100m地点の15で縄文時代晩期の埋甕のほか、16・23で同中期・晩期の土器が出土している。また、13・16・17・22では、弥生時代中期の遺構・遺物があり、22では、方形周溝墓および小銅鐸がある。古墳時代前期では、11・15・21、同中期では4・22で遺構・遺物が検出されており、4・5・15・17で埴輪が出土しており、近辺に古墳の存在が考えられる。飛鳥・奈良時代以降は12・23などで遺物が散見されている程度である。

2. 調査概要

1) 調査方法と経過

今回の調査は、八尾市志紀町南四丁目地内で行われた公共下水道工事(21-28工区)に伴うもので、当調査研究会が弓削遺跡内で実施した第10次調査(Y G E 2009-10)にあたる。調査区は10か所で、人孔9か所(1~9区)、管路部分約35m(10区)である。総面積は約64m²を測る。そのうち、人孔4か所(1~4区)、管路部分1か所(10-1区)は平成21年度に、人孔5か所(5~9区)、管路部分5か所(10-A~E区)は平成22年度に調査を実施した。調査では、八尾市教育委員会作成の埋蔵文化財指示書に基づき、現地表(T.P.+13.6~14.0m)下1m前後までを機械掘削とし、以下現地表下1.8~2.25m(T.P.+11.5~11.8m)までの地層については、重機と人力を併用して掘削を行った。各調査区では、地層状況および遺構・遺物の有無などの検出に努めた。



第1図 調査地周辺図

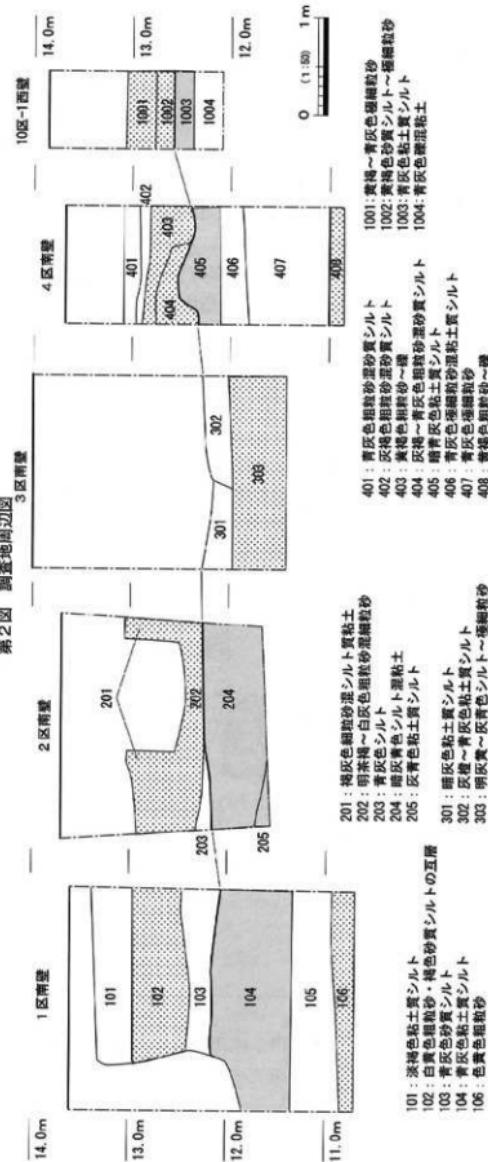
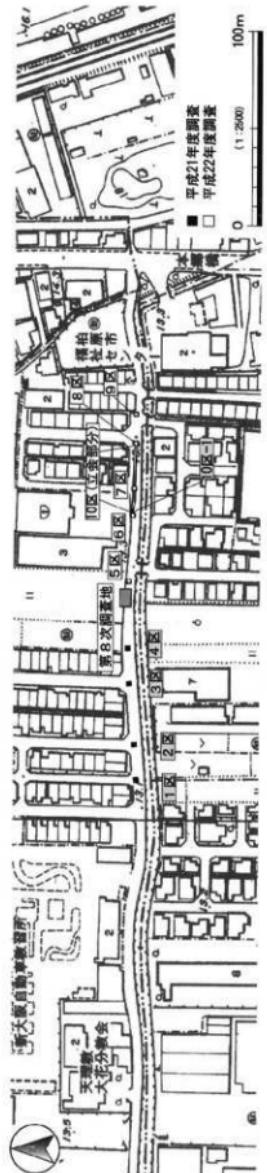
第1表 周辺の調査地一覧

遺跡名	番号	略号	調査主体	主な成果	文献
弓削遺跡	1	90-533	八尾市教委	弥生後期末：土器	『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』 八尾市文化財調査報告25 1992
	2	94-631	八尾市教委	弥生後期末：土器	『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書1』 八尾市文化財調査報告33 1996
	3	98-380	八尾市教委	河川堆積層（弥生土器・須恵器・埴輪）	『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書1』 八尾市文化財調査報告40 1999
	4	99-429	八尾市教委	弥生後期：土器・古墳中期：土坑・古墳中期半：埴輪・中世以降：井戸	『八尾市内遺跡平成12年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告44 2001
	5	99-524	八尾市教委	弥生中期：土器・弥生後期：溝状遺構・小穴・落込み・古墳中期：溝	『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告3 平成13年度』 2002
		YGE2000-3	調査研究会	弥生後期：土器・古墳後期：埴輪・近世：溝	『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告48 2003
	6	2002-23	八尾市教委	弥生中～後期：土器・石器	『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告53 2006
	7	2002-66	八尾市教委	近世以降：溝	『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告75』 2003
	8	2004-347	八尾市教委	近世以前：河川堆積層	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告78』 2004
	9	YGE2003-4	調査研究会	弥生後期：土坑	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告79』 2005
	10	YGE2003-5	調査研究会	河川堆積層	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告80』 2006
	11	2007-54	八尾市教委	奈良前期：土器群	『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書』 八尾市文化財調査報告57 2008
	12	YGE2007-7	調査研究会	古墳前期後半：落込み・古墳中期後半：溝	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告112』 2008
	13	YGE2008-8	調査研究会	弥生中期・奈良：土器	『財團法人八尾市文化財調査研究会報告120』 2010
	14	YGE2008-9	調査研究会	河川堆積層	『弓削遺跡第9次調査 財團法人八尾市文化財調査研究会報告118』 2008
本郷遺跡	15	81-1 次	柏原市教委	縄文晚期：埋甕・古墳勿添・前期：井戸・古墳中期後半：埴輪	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要1981年度』 1982
	16	83-1 次	柏原市教委	縄文中末期：土器・弥生中～古墳前期：土器	『柏原市所在発掘調査概報—大畠・田辺・本郷遺跡—1983年度』 柏原市文化財報告1983-IV 1984
	17	83-2 次	柏原市教委	弥生中期中葉：溝状遺構・弥生中～古墳中期：土器・古墳後期：埴輪	
	18	84-2 次	柏原市教委	古墳後期：溝（須恵器・獸骨）	『本郷遺跡・玉手山遺跡—マンション建設に伴う』 柏原市文化財報告1984-VI 1985
	19	85-1 次	柏原市教委	古墳後期：土器等・須恵器・製塗土器	『柏原市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』 1986
	20	89-2 次	柏原市教委	中世以降：洪水層	『高井田遺跡・本郷遺跡—(1989年度公共事業に伴う)』 柏原市文化財概報1989-IV 1990
	21	91-1 次	柏原市教委	弥生中期：土坑・弥生後期：方形周溝墓・溝（小銅鏡）・古墳中期：堅穴住居	『本郷遺跡1991・1992年度』 柏原市文化財概報 1992-III 1993
	22	91-2 次	柏原市教委	古墳後期～飛鳥木：溝	『柏原市遺跡群発掘調査概報1994年度』 柏原市文化財概報 1991-IV 1992
	23	98-1 次	柏原市教委	縄文晚期：土器・弥生後～古墳前期：溝状の落込み（土器）	『本郷遺跡—公共下水道管理設に伴う』 柏原市文化財概報1998-IV 1999

2) 平成21年度の調査

平成21年度は、調査対象地の西部の4か所(1～4区)および東部の10区開削部分の1か所で(10区-1)で調査を行った。4区の東20mには、第8次調査地(第1図-13)が位置する。

調査地の現地表の標高はT.P.+13.6～14m、0.2～1m程度の盛土や擾乱が見られる。1・2・4・10-1区では、現地表下0.6～0.8m以下(T.P.+13m前後)で、河川埋土と考えられる砂層が確認できた(102・202・403・404・1001・1002層)。以下の0.5～0.8mに存在する104・204・205・405・1003層が構造面を構成する地層と考えられる。これらの層上面はT.P.+12～12.5mを指し、東が高い。さらに、1・3・4区では、T.P.+11～12m前後でも河川埋土と考えられる砂層を確認した(106・303・408層)。また、2区204層から瓦器(第4図-1)、205層から須恵器高杯(2)などが出土している。4区406層からは、土師器の小片が出土している。



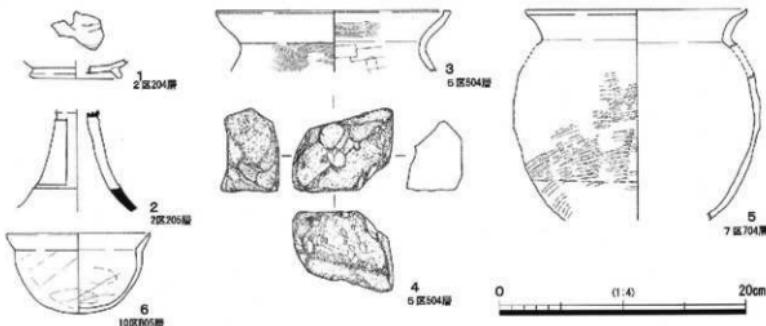
3) 平成22年度の調査

平成22年度は、調査対象地の東部の5か所(5~9区)、および6~8区間の開削部分の5か所で調査を行った(10区-A~E)。第8次調査地は5区の西に位置する。

調査地の現地表の標高はT.P.+13.7~14m、0.5~1m程度の盛土や擾乱が見られる。平成21年度の調査同様、現地表下0.6~0.8m以下(T.P.+13~13.2m前後)で、河川埋土と考えられる砂層が確認できた(501・601・701・702・A01・B01・B02・C01・D01・D02・E01・801~804・901・902層)。河川直下のT.P.+12.5~13mでは作土(502・602・A02・B03・C02層)が見られ、5区では小穴①を検出した。その下T.P.+12.1~12.9mでは遺物包含層(503・603・604・704~706・A03~A05・B04・B05・D03・E02層)を確認した。以下の0.4~0.7mに存在する504・605・707・A05・B05・C03・D04・E03・805・904が遺構面を構成する地層と考えられ10区-Bでは溝②を検出した。これらの層上面はT.P.+12~12.5mを指す。5区504層からは、弥生時代後期~古墳時代前期の土器(3ほか)、サヌカイト石核(4)、7区704層から弥生時代後期の壺(5)、10区B05層からは土師器小型鉢(6)などが出土している。

3.まとめ

今回の調査で検出した二時期の河川は同一の河川で、上層の河川は中近世、下層の河川は古墳時代以前のものと考えられる。また、調査地中央部の5~10区にかけては、弥生時代~奈良時代にかけての遺物が含まれ、遺構面も複数あることが確認でき、近隣の調査成果と同様の結果が得られたと考えられる。



第4図 出土遺物実測図

第2表 出土遺物一覧

番号	出土地	器種	法量(cm)	特徴
1	2区204層	瓦器 瓢	高台径 7.0	・見込みに螺旋状のハラミガキ
2	2区205層	須恵器 高杯	現存高 8.3	・長方形または卵形の2段造かしあり
3	5区504層	古式土師器 壺	口 径 19.0	・内ঙする口縁部、腹部は肥厚する
4	5区504層	サヌカイト 石核	6.9×8.2×3.9	・表面は風化が進む
5	7区704層	弥生土器 壺	口 径 18.0	・3分割成形
6	10区B05層	古式土師器 小型鉢	口 径 11.7 器 高 6.6	・やや尖り気味の体部





調査地近景 東から



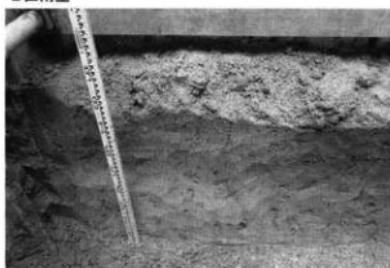
1区南壁 上層



2区南壁



同上 下層



3区南壁上層



4区南壁上層



同上 下層



同上 下層



5区近景 南東から



6区近景 西から



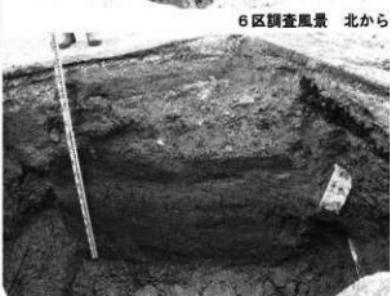
5区調査風景 南東から



6区調査風景 北から



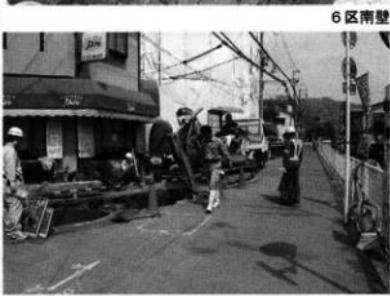
5区全景 南から



6区南壁



5区下層全景 西から



7区近景 西から



7区全景 北から



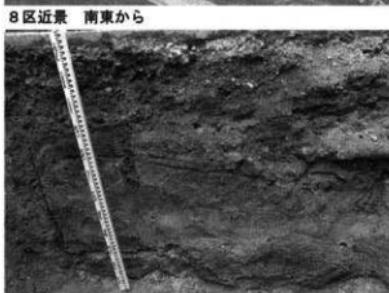
7区下層全景 北から



8区近景 南東から



9区近景 南から



8区掘削状況 東から



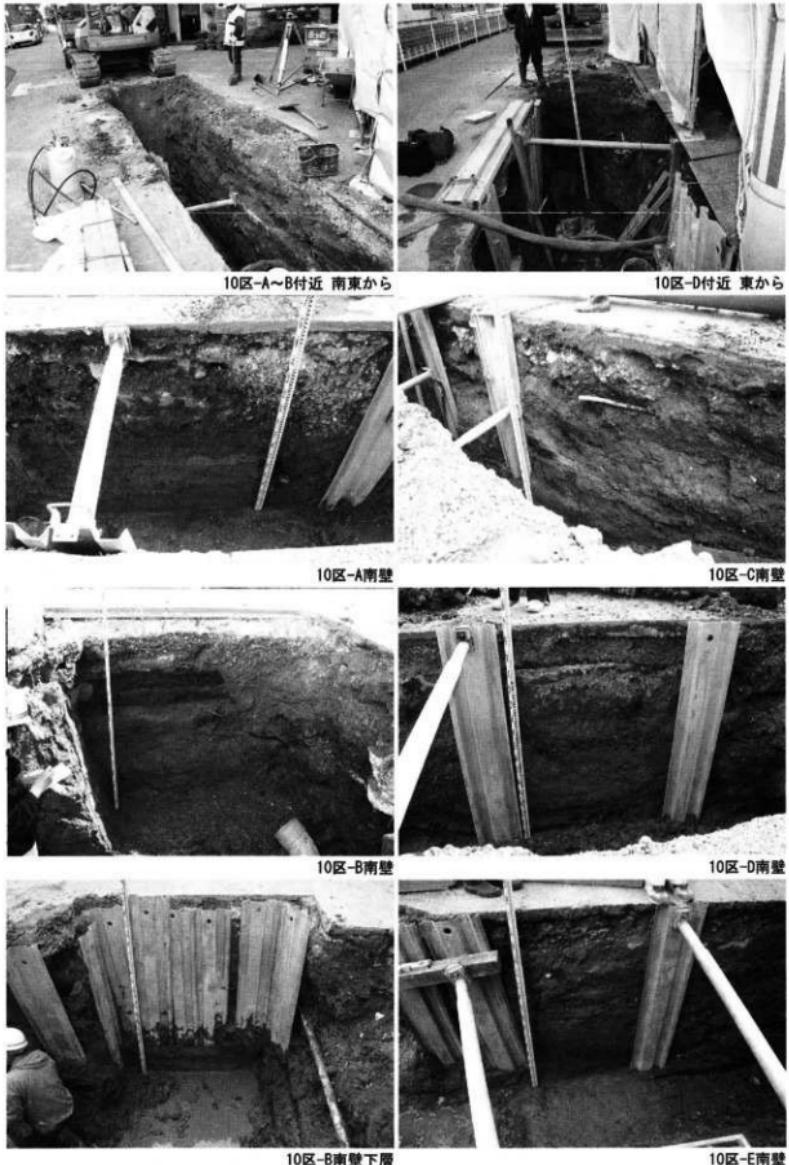
9区掘削状況 南から



8区全景 北から



9区全景 北から



報告書抄録

ふりがな	おんらいせき きのもといせき きゅうはうじいせき こおりがわいせき じょうはうじいせき
書名	ひがいせき ゆがいせき
副書名	恩智遺跡 木の不道跡 久宝寺遺跡 郡川遺跡 成法寺遺跡 東弓削遺跡 弓削遺跡
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	132
編著者名	I・II・V坪田真一(編)、II岡田清一、IV・VI高橋千秋、Ⅴ・Ⅷ・Ⅸ成海佳子
編集機関	財團法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒583-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX 072-991-4700
発行年月日	西暦2011年3月31日

ふりがな 所 収 遺 跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡 番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘 原因
		市町村	遺跡 番号					
おんらいせき 恩智遺跡 (第20次調査)	おおかみやおおしょんじかまち1ちょうめ 大阪府八尾市恩智中町1丁目	27212	30	34度 36分 36秒	135度 37分 39秒	20090914 ～ 20091022	約20	記録保存調査
おんらいせき 恩智遺跡 (第21次調査)	おおかみやおおしょんじかまち1ちょうめ 大阪府八尾市恩智北町3丁目	27212	30	34度 36分 37秒	135度 37分 51秒	20100305 ～ 20100308	約30.5	記録保存調査
さのいせき 木の不道跡 (第16次調査)	おおかみやおおしょんじかまち1ちょうめ 大阪府八尾市木本の本3丁目	27212	35	34度 36分 23秒	135度 35分 22秒	20090602 ～ 20090609	約54	記録保存調査
さのいせき 木の不道跡 (第17次調査)	おおかみやおおしょんじかまち1ちょうめ 大阪府八尾市木本の木8丁目	27212	35	34度 35分 51秒	135度 35分 23秒	20091204 ～ 20091208	約12	記録保存調査
きよはしじーせき 久々寺遺跡 (第25次調査)	おおかみやおじんわくちょう 大阪府八尾市神武町	27212	23	34度 37分 34秒	135度 34分 39秒	20090508 ～ 20090510	約9	記録保存調査
こおはわせき 郡川遺跡 (第9次調査)	おおかみやおしゃこうこうじかまち1ちょうめ 大阪府八尾市敷賀寺5丁目	27212	60	34度 36分 57秒	135度 38分 00秒	20100120 ～ 20100126	約36	記録保存調査
じょうはじせき 成法寺遺跡 (第21次調査)	おおかみやおしゃこうこうじかまち1ちょうめ 大阪府八尾市明光町1丁目・松山町1丁目	27212	73	34度 37分 20秒	135度 36分 10秒	20090721 ～ 20090807	約84	記録保存調査
ひだりかわせき 東弓削遺跡 (第17次調査)	おおかみやおしまやこかづまち1ちょうめ 大阪府八尾市都城2丁目	27212	31	34度 36分 20秒	135度 37分 20秒	20090512 ～ 20090602	約49.5	記録保存調査
ゆびせき 弓削遺跡 (第10次調査)	おおかみやおじしまやこかづまち1ちょうめ 大阪府八尾市志紀町南4丁目	27212	71	34度 35分 35秒	135度 37分 01秒	20100208 ～ 20100430	約64	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	参考事項
恩智遺跡 (第20次調査)	集落	弥生時代中期	落込み	弥生土器	
恩智遺跡 (第21次調査)	集落				
木の不道跡 (第16次調査)	集落	古墳時代前期 平安時代	落込み 自然河川	銅鏡 土器群、須恵器	
木の不道跡 (第17次調査)	集落	中世～近世	水田耕土		
久宝寺遺跡 (第5次調査)	集落	古墳時代前期	土坑	古代土師器	
郡川遺跡 (第9次調査)	集落				
成法寺遺跡 (第21次調査)	集落	奈良時代以前 奈良時代	自然河川 土坑、落込み		
東弓削遺跡 (第17次調査)	集落	平安時代以前 近世	自然河川		
弓削遺跡 (第10次調査)	集落	古墳時代以前 奈良時代以前 中世～近世 江戸時代	自然河川 溝、落込み 自然河川 小穴	弥生土器、古式土師器 土師器、須恵器 土器群、須恵器、瓦器	

要約	恩智遺跡では第20次調査で弥生時代中期の遺構を検出した。木の不道跡では第16次調査で古墳時代前期の落込みから銅鏡が出土した。久宝寺遺跡では古墳時代前期の遺構を確認した。成法寺遺跡では奈良時代の遺構を検出した。東弓削遺跡では近世の農事用井戸を検出した。弓削遺跡では古墳時代以前の自然河川や、奈良時代以前の溝や落込みを検出した。
----	--

(財)八尾市文化財調査研究会報告132

- I 恩智遺跡 (第20次調査)
- II 恩智遺跡 (第21次調査)
- III 木の本遺跡 (第16次調査)
- IV 木の本遺跡 (第17次調査)
- V 久宝寺遺跡 (第75次調査)
- VI 郡川遺跡 (第9次調査)
- VII 成法寺遺跡 (第21次調査)
- VIII 東弓削遺跡 (第17次調査)
- IX 弓削遺跡 (第10次調査)

発行 平成23年3月
編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581-0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地2
TEL・FAX 072-994-4700

印刷 梅近義印刷センター
表紙 レザック66 <260Kg>
本文 ニューエイジ <70Kg>
図版 ニューエイジ <70Kg>

